

地 球 最 後 の
“ ふ た り ”

野 口 典 正

二〇八六年一月一日

1

新しい年が始まった。

そこで。

いつまで続くかわからないが、これを期に日記をつけてみようと思いついた。

とはいえ、単に日々のできごとを書き連ねるのが目的ではない。

これから私は、とんでもないことをしでかそうと計画している。

人生で初めての大事である。

ただ、それ本当に正しいことなのかどうか、いまだに悩んでいる。

しかし、残された時間はきわめて少ない。

ここに至って、私は重い腰を上げることにした。

この日記は、やわな決心が揺らがないように励まし、また我が行動をチェックするためにも有効に働いてくれるに違いない。そう願っている。

二〇八六年の元旦。

数日後、私は六十三歳を迎える。この年齢まで入院するほどの大病を患わずにきたのは、私向きにカスタマイズされた健康管理システムのおかげである。

システムは、私の住む三階建ての一軒家のすみずみにまで行き届いている。年間を通じて適切な冷暖房や換気を提供し、ハウスドックは毎晩ベッドに寝ながら身体全体をスキャンしてくれ、変化の兆候を発見するや、すぐに対処してくれる。

だからこの十数年、家から出る機会ほとんどなかった。何を好き好んで、病原菌のウヨウヨする戸外に出たいものか。とはいえ、二十一世紀半ばに地球上のほとんどの病原体は死滅している。風邪の苦しみなど、体験したくても二度とできないだろう。

住環境に関しては、細かい点を差し引けば、文句のつけどころがない。

ただ、「この地球に生き残った最後の人間」にとつて、それがどれほど価値のあることなのか？

話は五十年ほど前にさかのぼる。

二〇三五年の四月一日。

シカゴのとある大病院で、奇妙な現象が起こった。

この日生まれた赤ん坊、十数人の身長、体重の計測数値がすべて同じだったのだ。

ニュースがネット上に掲載されると、あちこちの病院からも同じ報告がなされた。

やがてこの珍事がアメリカのみならず、全世界的に起きていくことが判明してくると、最初はほのぼのと受け止めていた人々の首を傾げさせた。

前代未聞の事態に、世界中のあらゆる有識者が意見を求められたが、誰も答えることができなかった。

十二歳だった私は、当時の様子をはつきりと覚えている。

連日の報道は、その深刻の度合いを深めていった。

なぜなら、ザ・デイ（《その日》）を、いつしかこう呼ぶようになった）以後に生まれた赤ん坊たちも、すべて、ザ・デイ生まれの子とまったく同じ身長と体重だったからである。さらに三日目の夕方に確認されたことだが、代々褐色の肌を持つ、ある両親から生まれた赤ん坊の肌は、明らかに褐色ではなかったのだ。

一年後、世界保健機関の調査委員会がまとめた報告

書が公開された。そこに書かれていたのは、人々が予想していた以上に驚くべき事実だった。

ザ・デイ・アフター・チャイルドは、一人の例外もなく、外見的特徴が同一だったのだ。

栗色の髪、暗緑色の目、薄褐色の肌。血液型はおろか、DNAレベルまで精査しても、個体間の相違は確認できなかった。

成長速度についても、まったく個人差はなく、満一歳を迎えた子供らの写真を並べたところ、両親でさえ見分けることができなかったという。

思い出した。最初の恐慌は、彼らが義務教育年齢に達したときに起こったのだ。

テレビ画面に映った教室の光景は異様だった。同じ顔、同じ体型、同じ声。唯一異なるのは、親からもらった名前だけ。担任はいちいち名札を見なければ誰なのか判別できなかった。

そして担任は、同じ筆跡で書かれた答案に、同じ点数を与えるしかなかった。誰もがまさかと思つたが、子供たちは学力や科目の得意不得意はおろか、その思考過程まで同じだった。

付け加えると、趣味や嗜好も同様で、給食に出た肉料理に、子供たちはひとりとして手をつけなかった。全員がベジタリアンだったのだ。

混乱は年々、増加の一途をたどっていった。

同じ顔の子供らが、やがて中学、高校と進学するにしたがい、混乱はピークに達した。

人類は、自らの構築した傲慢の社会機構が、じつは同じ外見をした人間を受け入れるようにはできていないことを痛感させられた。

人々は自主的に産児制限をおこなった。つまり、産

みたがらない夫婦が増えた。ところがその分、別の夫婦の間に双子、三つ子が生まれた。

救いがまったくないわけではなかった。

同じなのは外見だけでなく、内面においても同様で、彼らは一人残らず従順でおとなしく、やさしい性格の持ち主だった。

二〇五三年三月、東京都内の高校で銃乱射事件が発生した。

ちょうど卒業式の真つ最中で、同じ顔をした三年生たちの十数名が銃弾を浴び、死傷した。犯人はノイローゼが原因で退職した元教師だった。「彼らは今に世界を乗っ取るつもりだぞ」。犯人はそう叫んだという。

痛ましい事件だったが、現場にいた人々はさらに驚嘆すべき光景を目にした。冷静な行動で犯人を取り押さえたのは、同じ顔をした三年生の生徒たちだったのだ。現場にいた父兄たちは「まるで組み体操を見ているようだった」と後に証言したように、見事な連係プレーで犯人を取り押さえたのだった。

以前から彼らはテレパシーで意思の疎通ができるのではないかと囁かれていたが、この事件はそのうわさに拍車をかけることになった。

コピード。

二〇三五年三月以前に生まれた人々は、恐怖と抑鬱の意味を込めて、彼らをこう呼んだ。オリジナルはきつと人類そのものだろう、彼らは我々の平均値に過ぎないと。

だが、彼らの発生した要因は、そもそも何なのか？

振り返れば、発端となった出来事は二〇三四年の春に起きていた。それが発端だと気づいたのはずっと後

になってからのことだが。

その夜、空には昼間と見まがうほどの光が満ちあふれていた。

巨大な彗星が地球のそばをかすめ飛んだのだ。十分に安全な距離があると天文学者は太鼓判を押したが、彗星のちっぼけなかけらのひとつが、母星を離れて地球に引き寄せられ、不運にも中国の原子力発電所に落下した。

空中に放出された放射能は気流に乗って、世界の空をおおうことになった。

中国側がしつぷ提出したデータをもとに、あらゆる生態系への影響が調査されたが、結論は「たいしたことはないだろう」で締めくくられた。

ところが、コピードが母親の胎内に宿ったのは、それ以後のことだったのである。結びつけて考えないわけにはいかない。再び調査がおこなわれた。しかし原因はついに解明されなかった。

上記のことからは、すべてネットニュースで得たものばかりだ。私自身、科学者でも何でもない。平凡な一会社員に過ぎなかった。だから情報はすべて又聞きである。

私も、広がる混乱と不安に振り回された、ただの一市民でしかない。

そんな私が社会との交流を断つたのは、まだ40歳前半のことだった。以後、自宅から百メートルと離れたことはない。

上にも書いたが、人類最後のひとりとなってしまったのは、何をする気にもなれない。ひたすら、孤独と戦うだけの日々なのである。

玄関の呼び鈴が鳴っている。

どうやら来客のようだ。腕も疲れたし、ひとまず休憩することにしよう。

2

続きを書く。

呼び鈴には正直、ドキッとした。知らないうちにお屋になつていたらしい。

来客は隣家の十歳の少年だった。彼は朝昼晩と食事を盆に載せて持ってきてくれる。調理するのは少年の母親である。私は料理がまったくできないので、世話になっていたので。

コピードはインスタント食品を好まない。数年前から一切のインスタント食品が製造中止になっている。困った時代だ。

「おはようございます、おじさん」

「おはおう。毎日すまないね」

「今日は八宝菜定食ですよ」

「うまそうだ。ありがたくいただくよ。お母さんによるしく」

お決まりの会話が交わされ、少年は盆を寄越すと、さわやかなほほえみを浮かべて帰っていく。一日三度の日課である。

少年はもちろんコピードであり、彼の父母もそう。さらに兄と姉がいる。言うまでもなく全員が揃うと、同じ顔が同じ声で「こんにちは」とていねいにあいさつしてくれる。

彼ら一家は、私を監視する役割を担っている。この世に生き残った最後の人類の生活を、それとなく見守っている。

私が死ねば、地球の覇権はコピードたちの手に渡る。心やさしい彼らは決して事を急いだりはしない。それどころか、私の体調に異変がないかどうか、健康管理システムから出力されるデータを日々チェックし、変

調の兆しがあればすぐさま同じ顔をした医者と看護師が駆けつけてくる手はずになっている。ありがたいことだ。

コピードたちは、どれも同じ能力を有しているわけだが、皆が同じ職業に就いてしまうと、さすがに世の中が機能しない。彼らは形だけの議会で「くじ引きで仕事を選ぶ」ことを全会一致で採択した。異論が出なかったことは言うまでもない。

人類が消滅した過程も記しておこう。

振り返れば、それは生きる意欲をなくした人類という名の老人が、両膝をつき、頭をたれ、道端に倒れこむのに似ていた。

一時期、人々は、コピード抹殺を叫ぶ過激派と、こんなことはいつまでも続くはずはないから冷静に対処すべきという穏健派との間で、さまざまな衝突が、さまざまな形で繰り広げられた。しかし結論が出ないまま時間ばかりが過ぎ、気がつけばコピードは数で人類を凌駕し、コピードの貢献なしでは世の中は回らないところにも来ていた。

人類は最後まで、コピードを人間とは認めなかったところが、コピードたちはそんなことなど気にしていないかのように振る舞い、ひたすら低姿勢で自分たちの労働に甘んじ、従事し続けた。

人類は結局、何ら実りある対処法を発見できないまま、権力を彼らに禅譲してしまった。

人類は急速にその数を減らしていった。理由はまちまちだが、未来に希望を見出せないという点では共通していたようだ。

十年前、生き残りが一万人を切ったとき、コピード

は愛の手を差し伸べた。ハワイ、オアフ島を人類限定の街として明け渡すと宣言したのだ。

それは強制ではなかったが、断る者はいなかった。私を除いて。

呼び鈴が鳴って、少年が食器を下げに来てくれた。

さて、オアフ島が最後の楽園に選ばれ、一万人が余生を過ごすことになったのだが、それでも人口は急坂を転げ落ちるように続けた。

ある日、ホノルルの街が廃墟と化したことがテレビニュースで報じられると、私の名前が読み上げられ、

「彼が快適に生活できるよう、皆で応援しましょう」と呼びかけられた。

よけいなお世話だ。

そろそろ、準備にかからねばならない。計画はいよいよ今夜、決行だ。

書き足りないことが山ほどあるが、ひとまず筆を休めよう。

3

元旦の日が暮れた。

いつものように、少年が夕食を運んできてくれ、一時間後に、空になった食器を持ち去っていった。

平静な応対をするよう心がけたが、これがなかなか骨が折れた。コピードは決して勘の鋭いほうではない。それでも、私が不穏な計画を胸に抱いていることを悟られないよう、注意するに越したことはない。

今、コーヒーを飲みながら、これを書いている。

緊張感が増してきた。

十数年ぶりに自宅を離れて遠出しようというのだ。

あくまでも隠密裏に。
コピードに悟られないように。

まさかこんな大それた行動に出ることになるとは。

誰かに命令されたのでも、薦められたのでも、ノセられたのでもない（そんな人間など存在しない）。

三週間ほど前のことだった。国会で新たな法案が提出され、全会一致で可決し、即日施行された。お役人は全員コピードであるから、反対する者などいようはずがない。

人類がいなくなり、世の中は恐ろしくスムーズに流れるようになった。議論もない。喧嘩もない。いじめもない。当然、戦争や紛争もない。世界を覆っていたあらゆる問題が消滅した。コピードが文字通り一丸となって行動したため、地球温暖化や砂漠化など、異常気象の問題は一掃された。食糧問題も解決し、地域紛争、テロなど過去の話になった。

いいことづくめで結構だが、つまるところ、生活面ではひたすら退屈な世界が現われることになった。まあ受け入れるしかないが。

ただ、その日に通達された『記録抹消令』には大いに抵抗を感じた。

現在から十年以上前の記録は、すべて抹消せよというものだった。

以前、私はビジネス用のソフトウェアを作る会社に勤めていた。プログラマーたちが作り出す何万行というソースコードを管理するのが私の仕事だったのだが、実際に会社に向くのは月に一、二度。ほとんどの業務は自宅の地下室にこしらえた仕事部屋でこなしていた。だから仕事をしなくなった今も、階段を下りれば雑然と積まれ、ほこりをかぶった数十台のコンピュータと対面することができる。

コンピュータのハードディスクには、どれも古いソ

フトの残骸が記録されたままだ。新しい法律はそれらをひとつ残らず消してしまえというのである。

そもそも、なぜそんな法律ができたのか、私は理由を知らないし、ニュースは何も伝えてくれなかった。コピードたちはテレパシーによって瞬時に知ることができるだろうが、人類最後の私だけは蚊帳の外である。一度、隣家の主人に尋ねてみたが「いやあ、ははは」と、ごまかされて終わった。

一ヶ月後には、記録がちゃんと消されたかどうか、政府のお役人が調査に回ってくるという。私は掃除機を片手に、地下室に降りていくと、久しぶりに壁の電源をオンにした。

データの消去など、まるごとプレス機で破壊してしまえば済む話である。ところが持て余すほど時間のある私は、老眼鏡の目をしばたかせながら、ご丁寧に一台ずつチェックしていくことにしたのである。

半数はもはや起動すらないガラクタだった。ドライバーで丹念にネジを回しては、ほこりをかぶったディスクを取り外していく。ポワンと起動音があるものに対しては、ついつい昔を懐かしむ気持ちが湧いてしまう。いつしか私は本来の目的を忘れ、どんなデータが残っているのか、むさぼるようにフォルダの奥へ奥へと分け入っていた。

最も興味を惹かれたのは、古いWebニュース。人類がまた我が世の春を謳歌していた時代。わずか数十年で自分たちの未来が消えてしまうとは想像もしていなかった。そんな頃の出来事の断片が、メールやキャッシュフォルダの中にひっそりと残っていた。

四季折々の風景や各地で行われる祭りの数々。高校野球の開幕。ゴールデンウィークの行楽情報。話題の映画が公開。さらにはコンビ二強盗やら各種の食品偽装問題。今となってはどれも歴史的な事実を過ぎず、懐かしささえ感じさせる。

コピードは祭りもスポーツも観光も映画も好きではなかった。音楽や芸能にも興味がないうらしく、テレビ番組もニュース以外は政治討論会ばかり。平凡な一人類としては、図書館に所蔵された過去の映像を検索して楽しむしかなかったが、それらも数年で鑑賞し尽した。

そこへ、降ってわいたような記録抹消令。古い先知いわが身。これから何を楽しみに生きていけばいいのか。

問題の記事を発見したのは、そんなことを考えながら、ある一台のパソコンをチェックしていた時だった。本当に偶然だった。こんな一文が目が捉えたのだ。「こびいどのげんいんはほうしゃのうだけではない」ひらがなだけで書かれた一行。前後の文章とはまったく脈絡がない。

直感した。これは一般の検索に拾われるのを避けるためだ。掲載ページはPDF形式になった百五十ページもある書類の八十五ページ目。どこかの研究機関の定時報告書らしく、雑多でさして重要なことは書かれていないのに、その一文だけが妙に浮いていた。

しばらく眺めていると、文章が別のドキュメントファイルにリンクしていることが分かった。思わずダウンロードし、閲覧した私は驚きのあまり、呼吸困難に陥った。

「コピードが生まれた原因は、原子炉から洩れた放射能に、彗星から降り注いだ地球外物質が混じり合い、その化学反応によるものと推測される」

二〇八六年一月二日

1

我が目を疑った。

何万という数の科学者が、何十年もの歳月を費やして、コピード発生之谜を解明するべく研究を重ねてきた。だがそれらの試みはことごとく失敗に終わった。ところが私の発見した文書には、そうではなかったと書かれている。

コピードの科学者たちは自分らを研究対象になどしなかった。そのせいで、最後の科学者が死んだ時点で研究は打ち切りになっていた。

なのに、これはどういうことだ？ すでに謎は解明されていて、その原因は放射能だけではなく、地球とニアミスしたあの彗星が絡んでいたとは！

私はあらためて書類全体に目を通した。専門用語ばかりで理解するには程遠かったが、名前も分からない筆者の言いたいことは把握できた。彼はどうやら自分の仮説を検証するための装置を作り上げていたらしい。文章には実験の進め方が書かれてある。

果たして、これは事実なのだろうか？ 事実だとしたら、どんな結果が出たのか？

残念ながら、肝心な部分は書かれていない。筆者は実験を直前にして倒れたのか、それとも…

コピードが自分たちに関する研究を快く思っていないと噂が立つたことがある。「自分たちの存在を脅かす研究に対して、彼らは容赦なく妨害工作を仕掛けてくる」。そんな話を耳にしたこともある。何人かの人類運動家が抗議に立ち上がったが、彼らの姿を二度

見ることはなかった。もちろんコピードは噂を否定し、批判者失踪への関与も否定した。いつもと変わらぬ微笑を浮かべながら。「わたしたちがそんなことをするはずがないでしょう？」

さて、私が今いるのは公園の片隅だ。フェンスと茂みの間にある僅かな空間。

厚手のコートの間から冷気が容赦なくしみ込んでくる。

とうとう家を出てきてしまった。十数年ぶりの外出がこんな形になるうとは。

午前0時をまわった頃、私は携帯食料とコーヒーの入ったボトルをリュックに詰め、勝手口から戸外へとすべり出た。隣家の灯はとうに消えていた。コピードは早寝早起きである。好都合だ。

壁伝いに裏にまわる。雲が月を隠している。音さえ立てなければ見つかる心配はまずない。

低い柵を乗り越える。アスファルトの道路まではちよつと飛び降りるくらいの高さがあった。60歳を超えた運動不足の肉体には最初の試練である。意を決してジャンプすると、足の裏に鈍い衝撃があつて、私は路上に転がった。幸い、車も人影もない。急いで足首に手をやり、捻挫をしていないことを確かめ、急いで反対側へと渡った。

目的地はK大学のキャンパス。例の書類はこのサーバーの中に保存されていた。書いた人間がいたのがそこかどうか、行つてみるしか知るすべはない。

大学の所在地は、隣りの隣の県だ。車を使いたかつたが、こんな時間だと目立つ。何しろコピードのほとんどは寝ている時間帯だ。

私は近所の団地に向かった。駐輪場で適当な自転車を選ぶと、よつこらせとまたがり、出発した。鍵がかかつていないのは、どれも同じだ。この世界に泥棒や

強盗は存在しない。すべての扉から鍵穴が消えたのは、何千年ぶりのことだろうか。

自転車は国道をひた走った。すれ違う車はなく、街は静かだった。あわてて出発し、そのまま全速力で漕ぎ続けたので、すぐに息が上がった。これではK大学までもたない。空腹も感じたので、一時間ほど走ったあたりで、通りに面した公園にハンドルを切った。もしもの時に人目につかないよう、自転車を茂みに隠した。リュックからクッキーを取り出し、保温されたコーヒーをすする。寒い中を必死で漕いできたせいで、膝がガクガクと笑っている。

思わず苦笑した。こうまでして、私は何をしたいのだろう？

私には家族がない。若くして父母を亡くした後、これまでの人生をひとりで生きてきた。他人と付き合いのが下手なせいで、同僚たちと飲みに行くこともなく、仕事を終えれば帰宅するだけ。休みの日は家でぼうつとしてるだけ。友達もいなければ、恋人もいない。そんな生活の連続で、母親は今わの際に「お前の老後が心配だよ」と言い残した。

人類が私を最後に地上から姿を消してしまった、あの日。

何も感じなかった。ずっと以前から誰ともつながっていないかつたから。

だから、コピードの謎なんか、いまさらどうだっていい。どうだっていいのだ。

寒さがつらくなってきた。そろそろ移動しよう。

ただいま午前四時。椅子に腰掛け、事務机に向かいながら、これを書いている。

大学の研究室には首尾よく侵入できた。もともと鍵など掛かつていないし、警備員もいなければ、セキュリティシステムもない。

サーバーの部屋にはあつという間にたどり着いた。寒さと長時間のサイクリングで疲労困憊だったが、老体に鞭打ちながら端末の前に腰掛け、すぐに書類の所在を探しにかかった。

半ば予想していたことだが、書類は見つかりなかつた。『記録抹消令』によって、ディスクの中身は早々と掃除されていたのだ。

それでも消されたファイルの名前リストだけはログの中から拾い出すことができた。そこには私が見つけた書類の名前が確かにあつた。この場所なのだ。あの仮説を立てた科学者がいたのは。だとすると、装置はどこに？

私は研究室の中をさまようように歩き回った。八階建てコンクリートの建物の五階にあたるこの研究室は、内壁の扉続きで三部屋あり、どの部屋にも、あるのは素人には用途不明の装置類ばかり。

これまでか。せめて装置の名称くらい判明していれば探すあてもあつたのだが。

私はがっくりと肩を落とし、しかたなくここまでのことを日記に綴っている。もうすぐ夜が明ける。8時になれば、隣家の子がまた朝食を持つてくる。それまでに帰宅しなければ、不在がコピードに知られ、瞬時に捜索が始まるだろう。そうなると今夜の行動が何に起因するか、彼らに知られるのは時間の問題だ。きっと私は危険分子として軟禁されるだろう。どうする？

2

午前六時二十分。

急転直下、事態は予想もしない方向に発展した。

今いるのは、さつきとは別の建物。同じキャンパス内にある原子炉工学科の実験棟だ。

時間がないので、あれからのことを急いで記す。

八方塞りの状況に、肉体的な疲労も重なり、深々と椅子に腰を下ろした私は、そのまま動けなくなってしまう。少しうたた寝したかもしれない。

そんな夢うつつの中で、ひたひたと廊下を近づいてくる足音を耳が捉えた。続いて扉が開き、部屋の明かりが灯された。

間一髪、私は机の影に身を潜めた。

突然のことに、心臓が止まる思いがした。じつところ、私は心臓に持病を抱えている。ここまでの冒険だけでもかなりの負担をかけているというのに、突然の侵入者は私を殺しかけたのだ。もともと侵入者は私のほうなのだが。

「こんばんは」

鈴のような声が研究室に響いた。女性だった。

「わたしの名は、F20600225—3EAD4E3。通称スピカです」

声は姿の见えない私に向かって自己紹介した。Fは女性を表し、続く数字は生年月日およびその日何人目に生まれたかの通し番号を十六進数で表したものである。もちろん、コピード特有のIDだ。

律儀にスリッパに履き替えなくてよかった。私はスニーカーの足音を立てないよう、並んだ机を盾に横へと移動する。

「きつと、いつかはここに来られるものと確信していました」

スピカと名乗るコピードは、姿の见えない私に対して、朗読でもするような口調で淡々と話し始めた。

「今夜、この建物にいるコピードはわたしだけです。あなたの来訪は、熱感知システムが教えてくれました」

熱感知システム？ その前に、彼女は私の侵入を確信していたという。どういうことだ。

「そうです」私の心の声に応えるように言う。「だからその『記録抹消令』だったのですから」

思わずうめき声が漏れた。あの性急な法律は、私に對するものだったというのか。

「とはいえ、来てくれる確率は1%以下という予測でした。あなたがあの情報を目にする可能性は、とても低かったはずなので」

あの情報。どうやら、コピードの秘密を解明したという文書のことらしい。さらに机の横をすり足で移動する。

「でも、あなたは見つけてしまった。見つけたあなたが行動を起こす可能性、これも大変低いと見積もっていました。ところが蓋を開けてみると、侵入はこんな夜更けにおこなわれた。何があなたを突き動かしたのでしょうか。とても興味があります」

彼女は個人的な感想を述べているのではない。コピードの意識は互いにつながっているから、彼女の話は全コピードの総意を代弁していることになる。しかし、「興味を惹かれる」とはどういう言い回しだ。癩に障る。コピードのくせに上から目線じゃないか。コツツとひとつ足音が鳴った。私は弾かれたように身体を硬くし、机の角を曲がった。ほぼ四つんばいのまままで。

「さて」スピカは短く言葉を切った。「そろそろ出てきてもらえませんか。向こうに応接間がありますので、そちらでお話しましょう。決してあなたに危害を加えたりはしません。それにご安心ください。わたしは一人です。他には誰も応援に呼んだりしていません」

彼女が言い終える前に、私は動いた。自分でも驚くほどの俊敏さでスピカのそばに駆け寄り、彼女の喉元に右手に握ったマイナスドライバーを押し当てた。さつき、しゃがんだ際に机の下にあった工具箱からつかみ取っておいたのだ。

「あつ」

スピカは小さな叫び声をあげた。反撃は予期していなかったらしい。

「騒ぐな」

かすれた声で私は慣れない脅し文句を口にした。彼女の首に巻きつけた左腕に力を入れる。

スピカと名乗った女性は身長百六〇センチくらいの中肉中背。もともとこれは同年輩の女性コピードに共通した体型だ。そしてポニーテールにした髪の下は、使い込まれた感のある白衣。

すばやく体勢を整えて、戸口のほうに目を走らせる。廊下に人の気配はない。

なんとという事態になってしまったのか。心臓にキリリと痛みが走った。

3

「どうか落ち着いてください」

スピカは首をわずかにねじり、哀願のまなざしを私に向けた。こうして見ると、彼女はまだ若い。名乗った時、二〇六〇年生まれと言ったから、二十六歳か。私はドライバーの先が彼女を傷つけないよう注意を払いつつ、混乱した頭で疑問を口にした。

「アンタがこの責任者か？」

意外にも、スピカは微笑を浮かべて、「いいえ、わたしは研究助手のひとりでしかありません。火元責任者でもありますが」

私は左腕を彼女の首から左腕へと移し、軽くひねり上げた。痛ツとスピカは顔を歪ませる。

「教えろ」。私はすぐんだ。「どこにある」

「何がでしょう？」

「とどけるな。装置だ、あの文書に書かれていた」さらに力を込める。スピカはしばし腕をバタつかせながら、すぐに観念した。

「分かりました。お連れします」

スピカが案内したのは、渡り廊下でつながった実験棟だった。分厚い扉を押し開けた広い部屋に入ったところで、私は彼女の首に巻きつけた縄を解いた。

眼下に、巨大な円筒形の設備が鎮座していた。

「これは：原子炉なのか？」

「そうです。大した出力はありませんが」

スピカはすたすたと空中に設けられた通路を進んでいく。あわてて追いかける私。

階段を下りると、真っ直ぐ原子炉の基部へと近づいていき、くると私を振り向いた。

こうして向き合うと、彼女がコピードであることがはつきりする。その顔は他のコピード、たとえば隣家の夫婦や私に食事を運ぶ仕事を担っている少年と瓜二つだ。

「お探しのものは、ここにありません。実験装置を作った研究者はとも頭のキレる方だったようです。破壊されるのを恐れて、じつに巧妙な形で設置されています」

「どういふことだ」

スピカはそばのパソコンを起動した。すると、画面に図面のようなものが現れた。

「原子炉の設計図です。ご覧ください、ここに小さな箱のような空間があるでしょう？」

覗きこむ。全体の大きさから考えて、人ひとりが入れそうな寸法だ。

「操作パネルはそこにあつて、他からは一切コントロールできない仕組みになっています」

「では私をそこに入れて」

「お勧めできません」

「なぜだ」

「装置の稼働中は、ずっとパネルに張りついていなければならぬのです。つまり」

ごくりと喉が鳴った。

「浴びるのか、放射能を」

スピカはごくりとうなずく。

「いくら小出力でも、被爆するには十分な量です」

しばしの沈黙が、静かな実験棟を覆った。私は呆然と原子炉の壁に歩み寄り、その静かで冷たい壁面に手のひらを押し当てた。

「なんてこつた。それじゃ使うことができないじゃないか、こんな装置」

腹立ちまぎれに拳を強く握り締める。息が荒くなる。また心臓に痛みが走った。

スピカはいつの間にか、オフィスチェアに行儀よく両膝を揃えて座っていた。

「お疲れの様子ですね。どうぞお座りください。そうだ」。スピカは腰を浮かすと、「温かいものをお入れしましょうか。紅茶でよろしければ」

「結構。コーヒーを持参している」

私はそばの椅子に倒れるように腰を下ろした。

リュックからポットボトルを取り出す気力も起きない。

「教えてくれ」

「はい」

「なぜなんだ。なぜ装置の操作部分を、危険な場所に設ける必要がある？」

「解体して使えなくするのを防ぐためでしょう。リモコン操作ができるシステムなら、本体との接続を断れば使用不能にできるのですから」

「操作部分を取り外せない？」

「できません。なぜなら、原子炉と完全に一体化しているからです。スピカは再び椅子にかけた。「この原子炉が建設されたのは、今から十二年前。あなたが目にした文書が作成されたのはその半年後。この実験棟の正体は、原子炉を含め、実験装置を作り上げるためのものだったのです。…と言いますが、我々が気づいたのは、ほん数ヶ月前でしたけれど」

私は上体をかがめるようにして、スピカの目をまっすぐに見た。彼女の瞳の向こうには、十数億という数のコピードの目が存在する。その意思の集合体、いや違う、集合体の意思、に対して挑むように質問を投げつける。

「『記録抹消令』は、私が文書にたどり着くのを阻止するためだったんだな。ところが逆に、文書を発見する引き金になってしまった。そのあたりの、講ずる手段のアウトさがコピードらしいところといえはいい」

スピカは肯定するように、視線を下げた。

「ひよつとして、あの噂は本当か？ コピードは私たちの発生源を調べようとする研究を、邪魔していたというのは」

「――否定はしません」

コピードは嘘をつけない。奴らの最大の美德が唯一の突破口だ。

「だから、どこかに存在するはずの秘密の文書が、人類の目に触れるのを阻止しようとした」

「ええ」

「ちよつと待て」。私は原子炉を振り向いた。「そんな小細工をするより、この設備をどうにかすれば良かったんじゃないのか？ コンクリートで埋めてしまふとか」

「おっしゃるとおりです」

再び沈黙が降りる。スピカの目は床の一点をただただ凝視している。私は次の言葉をじつと待った。

4

組んだ両手のひらが、じつとりと汗ばんでいた。実験棟の中は、適度な室温に保たれているようだが、緊張のせい、はたまた慣れない行動のせい、気づくと全身がべとつくほどの汗にまみれていた。

着たままだったコートを脱ぐ。すると、こもつていた体温が空中に四散し、身体の疲れが幾分やわらいだような気になった。同時に頭の中のもやもやも消えていく思いがした。

スピカはうつむいたままだ。まるで私がいじめているような気がしてくる。根負けだ。こちらから言葉をかけてやろう。そう思った時、すつと顔が上がった。

「心臓の具合はいかがでしょう。落ち着かれましたか？」

アツと思った。彼女は私の身体を知っている。

毎日の健康診断データは、彼らコピードに筒抜けだったということだ。彼女は私の心臓を思いやって、話の続きを一旦停止してただけだった。

コピードはコピード。彼らには人類のような、深い感情といった類いのものが欠落している。それでも彼らが感情的に見える時、それは彼らなりの理屈が顔面の筋肉を動かし、声を変えさせているだけなのだ。人類と同じ尺度で見えてはいけない。足をすくわれるぞ。変な汗が背中をつたった時、スピカは話を再開した。「実験装置を機能しないようにしてしまう方策は、いくつか検討されました。でも結局、何もしないことに決めたのです。理由は——とても一口では申せません」

スピカが初めて言いよんだ。

「ここまで来て、言えない、はないだろう」

いえ、違いますと首を横に振る。思い出せば、コピードは皆、意思を表すとき、必ずと言っていいほど首を動かす。それは昔、土産物屋で見た首振り人形を連想させた。

「明確な方針を打ち出すことができないのです。人類の遺産は我々にとつて、間違いなく貴重なものだから、未来永劫、アーカイブとして残すべきだという考え方。逆に、我々は人類の進化した、次の生命体だという自負から、過ちの多かった人類の歴史はことごとく消去してしまうべきだという考え方。コピードは相反するこのふたつの考え方の間で悩んでいるのです」

「——つまりは結論を先延ばしにして、ここを放っておくことにしたってわけか」

「そうですね。だから、装置に関する資料や文献、データもすべて保存してあります」

「保存だと？」私は声を荒げた。「十年前より以前の記録は抹消するっていうあの法律は、ここじゃ適用外なのかい？」

「お怒りはごもつともです」スピカは頭を膝につくぐらい腰を折り曲げた。「ご説明しましょう。ご存知のとおり、コピードは老若男女を問わず、コピーしたように同じ人格と性質を持っています。思考回路も全く同じですから、会議でもほとんど議論になりません。だから、誰かがミスすれば、すべてのコピードが同じミスをする可能性が極めて高い。そのため、これまでどれほどの失敗を重ねてきたことか」

「だろうな」

ぶつきらぼうに合いの手を入れたが、彼女は気にせず、続ける。

「病気に關してもそうです。ひとりがインフルエンザにかかれば、感染者は風の吹くようなスピードで全世界に広がるでしょう。だから我々は特に医学に力を入れ、日々監視と研究に努めています」

初耳だった。だが言われてみれば当然のことであり、コピードにとつては何より最優先の課題には違いない。「元来、臆病で小心者のコピードは、何事においても慎重です。そのようなわけで、我々は、我々にとつて異分子的存在や異なる考え方というものを排除することとはしていません。いつそれが役に立つかもしれませんから」

「すると——法律自体、私を騙すためのハッターしかなかつたんだな？」

「そう言われては心苦しいです。確かにあれば、あくまでもあなただけに向けられた法律で、他の場所では一切の記録をすべて大切に保管しています」

「人類も舐められたもんだな。コピードですと優しい顔をしていながら、都合のいい法律でこっそり私を騙し、人類の遺産をちゃっかり奪い取ろうという算段だったんだからな」

私は歯を軋ませて、天井を仰いだ。

「あなたは地球上に残った最後の人類です」

「今さら言われなくても」

「それでは、先ほどお話ししたことで、あなたが我々にとつてどれほど貴重な、いいえ大事な存在なのか、お分かりいただけますね」

「特別天然記念物みたいなものだからな」

「当初は、そんなあなたが危険な目に遭つたりしないよう、自宅に軟禁しておくべきだという考え方が主流でした。しかしここ数年、それも不自然であると。あなたが行動したいようにさせておくのが、我々本来の考え方に合致するのではないかとという主張が支配的です」

主張といったって、真つ向から異論が出るはずもない。

「そう、我々はずまるところ、優柔不断なのです。つねにあつちへこつちへと気持ちが悪くなる。それがひとりではない、何十億が一斉に同じ方向にブレる。あなたにその苦しみを理解することができますか？」

「地球最後の『ふたり』、か」

「え？」

「いや——人格という意味では、この世界に生きているのは、私と、それから『君』だけってことも言えるわけだな」

スピカはうんうんとひとりうなずいている。今頃、世界じゅうのコピードたちが同じ姿勢でうなずいてい

ることだろう。

「話を戻そう」。私は助け舟を出すことにした。「私
がここを突き止め、こうしてやってくる可能性を君た
ちは考慮していたし、こうして侵入することもあえて
許容したということだな？ 私の行動パターンを観察
するために」

素直にはいと答えるスピカに、私は最後の疑問をぶ
つけてみた。

「それじゃ訊くが」。私は原子炉を見上げた。「コイ
ツはいったいどんな実験をしようとしていたんだ？
いやその前に、コイツを完成させた奴は、結局、実験
を行わなかったのか？」

彼女は居住まいをただした。

「お答えします。彼は実験装置を完成させはしました
が、不運にも建設資材の下敷きになって、あえない最
期を遂げました。まさに、この場所で」

「……………」

「ところが、彼はよもやの場合を想定して、自分が一
定期間、パソコンにアクセスしなければ、あなたの
サーバーに例のファイルを送付するようにしていたら
しいのです。もちろんただ送ったのであれば、途中で
我々に気づかれる恐れがあるので、暗号化した上でで
すが」

「なぜ私なんかに」

「彼が地球最後から、二人目の人類だったから」

「ああ」

突然、私はえもいわれぬ感慨に打たれた。

見ず知らずの人間が、私にメッセージを送りつけて
いたとは。あのファイルには彼の意思が込められてい
たのだ。

「もうひとつの質問にお答えしますと、この装置が
やろうとしていたのは、どうやら、かつて起きたこと
の再現らしいのです」

「というと？」

「ザ・デイ。つまり、あの日起きた中国の原子力発電

所の事故による放射能漏れ、加えて、巨大彗星がこの
地球にばら撒いた未知の物質。彼はその物質を採取
し、この原子炉に閉じ込めました。そしてこの物質
を、二〇三四年に起きたのとは逆方向に加速し、反応
させることで、人類を復活させられるのではないかと
——」

彼女は言葉を切った。よほど私の顔色が変わってい
たものと見える。

なんとという大胆で驚嘆すべき実験。

私は目のくらむ思いがした。

5

人類の身に起きた、空前絶後の大災厄。

ほとんどの人間は、悲嘆にくれ、運命を恨み、自ら
の命を縮めていった。

そんな連中ばかりだと思っていた。

しかし、彼は違った。大いなる謎に果敢に挑み、実
験をおこなうところまで、たどり着いた。

同じ人類の一人として、彼を誇りに思う。偉大な科
学者だと思ふ。皮肉なのは、それほどの人間が志半ば
で事故死し、自分のような取り柄も何もない凡人が、
最後の人類として生き残っていることだ。

きつと無念だったに違いない。できることなら、私
の命と交換し、彼を生きながらえさせてやりたかった。

部屋の一角に机が置かれている。それを囲むように、
パソコンやさまざまな装置が雑然と重ねられている。

ひとり黙々と研究に励んでいる姿が目に見えよう。

「お聞きしてもよろしいですか？」

スピカの問いに、私は、ああと生返事を返した。

「あなたはもうずいぶん長い間、おひとり暮らし
しておられますが、寂しく感じたことはなかったの
でしょうか？」

「寂しい？」視線をスピカに戻す。

「あなたは、ハワイへの人類集合の呼びかけにも応じ
られませんでしたし——」

「好きでやってたんだから、いいじゃないか」

苛立たしげに返答したが、スピカはまったく動じず、
「それ以前も、人類ネットワークからは距離をとって
いたようにお見受けしました」

「——それも、調査か？」

「いえ、あくまでも個人的興味です」

「コピードに個人もへったくれもないだろ。いいよ、
聞きたければ答えてやる。私は人付き合いが苦手なん
だ。面倒くさいしな」

「面倒!?」

スピカは口を手で押さえつつ、目を白黒させた。し
かし私が眼光鋭く睨みつけると、悪さをした小学生の
ように肩をすくめた。

「しよせん君らにとつては理解の外だろうが、この施
設の謎を説明してくれた義理もあるし、教えてやろう。
最後の人類は、ただ生き恥をさらしているだけの、能
のない変わり者だったということだ」

「そんな」

「老人の繰り言と思つて、黙って聞いてくれ。私など
を人類の典型だと思われてはたまらんからな」

六十三歳の自分を「老人」と自称したところに、自
虐的な主観が多分に混じっていたが、口から出る言葉
は、奔流のように止まらなくなっていた。

「そもそも、二十年前に通勤を必要とする仕事を辞め
たのは、他人と顔を突き合わせる生活に嫌気が差した
からだ。当時、中年に差しかかった私は、遅まきなが
ら、ようやく自分という人間に社交性のないことを
自覚した。職場や取引先では喧嘩をする。恋人ができ
ても長続きしない。利害関係を抜きに付き合える同性
の友人もいない。両親は私の小さい頃に亡くなってい
たから、兄弟のいない私は天涯孤独のまま還暦を越え

た」

ふうと一息つく。スピカは眼差しを正面に据えたまま、まじろぎもしない。気にせず話を続ける。

「正直、あの頃は、自分自身に対して腹が立ってしょうがなかった。どうしようもない不器用さ。それが他人を傷つけ、諸刃の剣がおのれをも傷つける。私は日々憔悴していった。ポロポロだった。何もかもいやになった。もう限界だ——そう悟ったとたん、衝動的に仕事を辞め、家にこもる生活をスタートさせた。できる限り、世の中との接触を断った。——ハハハ、私がホノルルの人類村への誘いを拒否した理由が、これで分かったらどう？」

誰かとサシで話すなど、何十年ぶりか知れない。なのにその内容が極めて個人的で弁解じみている。照れ隠しのつもりで、つい同意を求めてしまったが、相手はにこりともせずに、ひたすら真剣な面差しで耳を傾けている。

そんなスピカに、私は無性にいら立ちを感じ、「そうだよ。私は他の人間には、一度たりとも連帯感を感じたことはない。私を受け入れてくれなかった連中が滅亡したことに、これでせいせいしたっていう感想しか持ち合わせてないね。そして、どうだい、今となっては唯一の生存者がこの私だ。神様もずいぶんと皮肉の利いた冗談をかましてくれたものだ。ハハハハハ」

「……………」

「まあ理解してくれとは言わない。でも、私を人類の代表だとか、誤ったレッテルを貼ったりはしないでくれ。迷惑だからな」

しゃべっているうちに、どうにも抑えきれない怒りが込み上げてきた。言葉は私の意思を離れ、逆る感情と格闘するかのように、調子っぱずれな色を帯びていた。

スピカはそんな私の話が途切れるのを待って言った。

「——憎んでいるんですね」

6

「憎む？」

私は床の一点を見つめながら、薄くなった頭髪を掻きあげる手をとめ、相手の言葉を繰り返した。

スピカは深呼吸を一つして間を取ると、ゆっくりと話し始めた。

「先にお詫びしておくことがあります。じつは、当局は以前よりあなたについて詳しい調査をおこなっておりました。私もつい今しがた知ったのですが」と、右手の指先を自分のこめかみに軽くあてつつ、「あなたは会社にお勤めの頃、提出した定時レポートで大きな記載ミスをしてしまい、会社に大きな損害を与えてしまったことがありますね」

絶句した。

いや、考えてみれば、コピードが最後の人類である私に興味を抱くのは当然である。どうやらスピカは、私の過去に関する情報を、他のコピードからデータベースによって伝達されたらしい。

「なるほど、あなたはその件に責任を感じて、自ら退社を願いだしたのですか。その際、会社は引き止めるようなことはなく、退職金さえ損害を補填するという名目で、一円も出なかった——」

「……………」

「でも、あなたの与えた損害は、会社の規模からすると、決して取り返しのつかないほどではなかったと思われませんが」

「自分が許せなかったんだ。それだけだ」

私は吐き捨てるように言葉を返した。だが、スピカは瞑想するように目を閉じ、朗読調のまま、唇を動かし続ける。

「会社側もどうやら余剰人員を減らしたかったみたい

ですね。そのため、あなたの依頼退職は渡りに船とばかり、すんなりと受理された。あなたはこのことを知りませんでしたか？」

「噂には聞いていた。が、今さらどうでもいいことだ。結局、私という人間は、組織にはなじめない性格の持ち主らしいからな。辞めることができて、清々しててくらいだ」

「——待ってください。あなたはミスを犯す直前、病院の精神科を受診していますね。食欲がなく、夜も眠れないなどの症状を訴えて」

今度は私が目を閉じる番だった。個人情報保護という概念は、コピードたちにとっては過去の遺物に過ぎないのだ。

スピカは聞き耳を立てるように、顔をわずかに傾けると、

「——なるほど——結婚式の直前に、婚約者が一方的に婚約を破棄し、別の男性のもとへ走った、と」

「もういい。やめてくれ」

私は椅子を蹴って立ち上がり、机の上に放り出したままのドライバーに手を伸ばした。

さすがに彼女も身体を強張らせ、口をつぐんだ。私は怒りを腕に込めると、部屋の隅めがけてドライバーを投げつけた。コーンと鈍い音が響き、部屋にはまた静寂が戻った。

「そんなに私のことが知りたいなら、包み隠さず教えてやろう。憎いかどうかと訊かれれば、鬱陶しい、と答えるだけだ。私以外の人類という存在がな」

心の中のタガが、ピンと音を立てて跳ねとんだ。

「端的な例を挙げよう。ホノルルに集まった奴らの中に、有名な映画監督がいた。彼は残り少ない人類の姿を記録したノンフィクション映画を撮ろうと思いついた。彼がそう思いついたのには理由がある。ホノルルの日本人村では人口が減るに連れ、互いの結びつきをより強固なものにするため、結婚や養子縁組が過剰な

ほど繰り返されていった。つまり、誰かは必ず誰かと家族関係があったわけだ。しかし、それならそれでいい。私がどうのこうのと言う筋合いはない。映画だつて好きだけ撮ればいい。私には関係のないこと——のはずだったんだ。ところがだ、ある日、その監督がわざわざ私を訪ねてやってきた。彼は開口一番こういった。映画に出てくれ、と」

「監督自ら、あなたに直談判を？」

「そうだ。彼の頭の中には、『頑固にも仲間との交流を断つて暮らす日本人が、最終的には日本人村の人々と合流する』というストーリーがあったらしい。リビングに迎え入れたら、途端に質問攻撃だよ。どうしてコピードだらけの町で暮らし続けるのか。なぜホノルルに來ないのか。今こそ來るべきだぞと。監督には『面倒くさい』という言い訳は通用しなかった。彼はしきりに訴えたよ、日本人村がいかに素晴らしいかを。すでに住民は高齢者ばかりになっていたが、みんな人類としての誇りを胸に、人と人のつながりを大切にしながら、支え合い、かばい合つて暮らしている。全員が親子であり兄弟姉妹である。これぞ人類の真の姿ではないか。——そう、彼は家族教の信者だったんだ」

「……」

「監督は言った。この映画は、君たちがホノルルに來ることで完結する。向こうには住む家も既に確保しているし、引っ越しにかかる費用も出すから、夫婦いっしょに今すぐ來てくれと」

「夫婦？」

「ああ」私は自嘲気味な笑みを禁じ得ず、「監督は私について、誤った情報を持っていた。婚約解消などしておらず、夫婦でひっそり生活していると思ひ込んでいたらしいんだな」

「……」

「独り暮らしだと知るやいなや、監督は手のひらを返したように態度を変えた。お化けにでも出くわしたよ

うな顔で私を見たよ。じつさい、彼の価値観では私の人生など認めたくなかったんだろうな」

「……」

「その時、監督のつぶやいたひと言が忘れられない。

彼はこう言った。『映画にならん』」

「それはどういう——」

「あの監督はね、ヒューマン・ドラマの巨匠と呼ばれた人で、一貫して人と人の絆というものをテーマに、作品を世に問うてきたんだ。その根本には、人は助け合い、信じ合うことで困難に立ち向かつていくことができる、そんな性善説が厳然として存在した。だから、私のような者が映画に登場したつて、感動的なお話にならないんだとさ」

「監督さんは、そこまでおっしゃったのですか？」

「失礼極まりない話だろ？ だから私も、売られた喧嘩という事で買わずにはいられなかった。『予定では、ノンフィクション映画だと聞いているが、ありのままの真実を伝えたいなら、私も出してくれないか』とね」

「監督さんは何と？」

「無理だ、と首を横に振られた。だからさらに言つてやった。『結局あなたは、肉親の愛情といつた安易な方法論でお涙頂戴の作品を量産する、替問作家でしかないのか』とね」

「——そうしたら？」

「無言のまま、帰つていったよ。後日、ネット公開された作品を観たが、私のことには一切触れられていなかった」

「……」

「あの時は、やりとり自体が不愉快な口論で終わったせいで、しばらく腹の虫が治まらなかったが、監督の言い分も分からないではないんだ。しよせん、誰とも関係を持つとうとしない変人は、物語の登場人物には不向きだよな。なぜなら劇的な展開など望めないからね。

といつても、映画嫌いなコピードの君には理解できないかもしれないが」

「理屈の上では理解できません」

ふと、目眩を感じた。時刻はすでに夜明けが近い。話を締めくくろうと、咳払いをして、

「さっきの質問に答えよう。私は誰も恨んではいない。かつての上司も、逃げた婚約者も、最後の映画監督も、みんなこの世にはいない——。知ってるか？ 日本には、亡くなった人のことは決して悪く言わないという伝統があるんだ。そして私も日本人のひとりだ」

スピカは小首を傾げたが、私は話はおしまいだとかかり立ち上がり、リュックを持ち上げ、

「そろそろおいとまするよ。長らく邪魔したな」とすると彼女は眠りから覚めたように目を剥き、

「帰る——のですか？」

「ああ、もうここには用もないしな」スピカが原子炉のほうに視線を流した。つられて私も顔を向けたが、すぐ彼女に目を戻し、首を横に振つた。

彼女はさらに何か言いかけたが、私はそれを手で制止して部屋を横切り、ドアに手をかけたところで振り返り向いた。

「いろいろと教えてくれてありがとうな、スピカさん。名残は尽きないが、隣りん家の子が朝ご飯を持ってきてくれた時に私がいないと、彼はきつと途方に暮れるだろうからね」

こうして私は研究室を後にした。

扉を開け、廊下に出ようとしたりと、またもや目眩に見舞われた。今度は先程とは比べものにならないほどのひどさだった。我慢できず、私は戸口と扉にはさまれた形で床にうずくまった。

「大丈夫ですか!？」

スピカの声が駆け寄ってきたが、視界がブラックアウトし、何も見えない。まるで深海にいるような気分だった。絶え間なく上下前後左右が入れ替わる責め苦は、地獄の苦しみだった。

暗闇の奥底でゆらゆらとごめくものがある。海藻を思わせるそれらは、次第に私のほうへと近づいてくる。それらは細長い形状をしており、途中で三本に枝分かれしていて、頭部と両手を連想させた。

「く、来るな、あっちへ行け!」

やみくもに腕を振っても、自分の腕すら見えない漆黒の闇ではどうしようもない。

「あつ」

スピカが小さな悲鳴を上げた。私の腕が彼女に当たったらしい。思わず腕をすくめる。しかし海藻はそんなことにお構いなく、ゆらめきながら私を押し包もうとする。

私は大声を張り上げた。頭が爆発しそうだった。心臓に絞られるような痛みが走った。それでも叫ぶのをやめなかった。

そのまま、海の底に引きずり込まれるように、腰から崩れていった。

どれくらい経ったろう。

目を開くと、一面が灰色の海だった。

「うわわっ」

悪夢の続きか。そう思つて顔の前には上げた手の平を目が捉えた。今度は見える。見えている。

「お気づきになりましたか」

そばで、スピカの安堵した声が聞こえた。

ここは？ と、視線をさまよわせると、心配げにのぞき込む彼女がすぐ横にいた。

「一階の医務室です。ベッドがあるのはここだけなのでお連れしました」

灰色の海と思つたのは、剥き出しのコンクリート天井だった。

「どのくらい気を失っていた？」

「三十分ほど」

私は手を動かして布団をはいだ。寝かされていたのは、何の飾りつけもない、医務室によくある無機質なベッドだった。

「お加減がよくなるまで、ここで寝てください」

「そんなわけにもいかん」

頭を左右に動かしてみる。幸い、目眩は治まっている。胸はどうだ。手を当てると、かすかな痛みが残っているが、動悸は平常に戻っていた。

私はぎこちなく上体を起こした。肘や腰のじわりとする痛みは、倒れた時のものだろう。

「本当に大丈夫ですか？」

「ああ」

胸元までかけられていた布団をよける。身体を回し、ベッドの上に座った状態になってみた。肩や腕を動かしてみる。大丈夫そうだ。頭の中もすっきりしている。わずかな時間でも眠つたのが効いたらしい。

「お帰りになられるのでしたら、しばらくお待ちください。車を持ってきます」

「いや——ここまで乗ってきた自転車があるから」

「無断で借りられたものですね？」

バレていた。コピードの連絡網は侮れない。

「ここで待つていてください。玄関に私の車を回しますのす」

返事するいと間もなく、スピカはドアから飛び出しつついった。

彼女が戻ってくるのを待つ間、ここまでであつたことを手早く日記にしたためた。

今日は一月三日だ。新年が始まってまだ間もないというのに、もう数週間が過ぎたような錯覚に陥る。それは昨夜がどれだけ波瀾万丈な夜だったかの証拠だし、昨年までの数十年がいかに退屈な日々だったかを表していたと言えるだろう。

朝の陽射しを浴びる直前の、まだ薄暗い街なかを、スピカの愛車であるパステルグリーンの軽が走っている。

コピードはみなパステルカラーが好きだ。乗る車も特に小型車を好む傾向にある。

私は他人の運転する車に乗るのは数十年ぶりだったし、ましてやコピードの横に乗るのは初めてだった。

自転車は責任を持つて持ち主に返却しておきますと、スピカは請け負った。

しまつたと、私は小さく叫び、腕時計に目をやった。八時五十五分。

「朝食のことでしたら、私が連絡しておきました」
驚いて顔を上げると、スピカは前方を見つ、にっこり笑い、

「隣りのお家のかたの伝言は、あなたの朝食を取り置いてますとのことでした」

「そうか——手間をかけたな」

「いいえ、このくらいでしたら」

「それから——倒れた私を介抱してくれたこと、礼を

「言わねばならぬ」

スピカは、いいえと小さく答えた

車は、私が自転車で真夜中に走った道を逆走している。すれ違う道はたで、時おり、コピードを見かけたが、みな一様にこちらを見ると、判で押したように、につこりと微笑みを浮かべながら手を振っていた。

「ひとつ、教えてくれ」

「どうぞ」

小さなシートの上で、私は軽く咳払いした。

「研究室で私が帰ると告げた時、君は変な顔をしたな。まるで私の行動が想定外だったと言わんばかりに違ってるか？」

「——違つてはいません」

彼女が返事するまでに、交差点を三つ通過した。

「やはりな」

私が目線で説明を促すと、小さいため息のあと、スピカは根負けしたように口を開いた。

「我々は決めていたのです。あの装置を動かすも動かさないも、あなた次第だと」

想像していたとおりだ。スピカは続ける。

「お話ししたように、我々は未来について決して楽観してはおりません。かといって、どうすればいいのかも分からないでいます。決して我々は見えてくれの表情ほど、心穏やかではないのです」

ハンドルが切られ、タイヤが軋み音を上げる。車体は大きく傾きながら、高速の入口へと突進した。

「コピードは彗星を母とし、原子力発電所を父として生まれました。それも、偶然による事故という形で。」

そう、コピードの誕生はまぎれもなく、宇宙万物の摂理に反していました。——そんな我々が頼りにできる主義主張も哲学も、さらには宗教もどこにもありませんでした。悩みぬいたあげく、たどりついたのは『なりゆきにまかせよう』という境地だったのです」

「なりゆき、だと？」

呆れてスピカを見る。人類に代わって地球を支配しようとする種族が掲げるには、あんまりなスローガンではないか。いくら絵に描いた優柔不断な性分だといえ。

しかし、スピカはハンドルを握った手に力を込めたまま、毅然とした視線を前に向け、

「だから、あの装置を動かすかどうかは、あなたの判断に委ねていました」

「何だと？ もし装置が正常に作動すれば、自分たちの身にどんな異変が起きるか、知れたもんじゃないんだぞ。それでもいいのか？」

「かまいません。コピードが到達した見解です」
無性に腹が立ってきた。

自らの運命を人まかせにする、そのあまりに脆弱な精神に憤りを感じたのだ。そんなことでは、滅亡した人類は浮かばれない。

いや、人類が浮かばれようがどうしようが関係ない。私には興味がない。だからこそ装置を前にして、平然と帰途についたのだ。

建物の間から、刺すような朝の陽光が、車のフロントウィンドウを輝かせた。

2

車は住宅地へと差ししかかった。

「ここで下ろしてくれ。歩いていくから」

そう言うと、スピカはさほど広くない公園のそばに愛車を停めた。

私はドアを開け、よつこらせと掛け声をかけながら、アスファルトの上に両足を下ろした。

さてと。

何と挨拶すればいいのか。

あらぬ方向に顔を向けたまま躊躇していると、

「もうお会いすることもないでしょうね」とスピカから話しかけてきた。

「そうだな——たいへん世話になった」

顔も見ずに、それだけ言って歩き出すつもりだった。多少礼儀に欠けても、どうせ相手はコピードだ、気にする必要はないのだ。

「どうかお元気で。たまには戸外にも散歩にお出になってくださいね」

私はつい舌打ちをしそうになった。

よけいな世話だ。コピード風情がいつぱしの口を利くな。研究所から、馴染みのある団地に戻つてみると、普段抱えている反感が、隠れていた心の片隅から込み上げてきた。

しかし、世話になったことは確かだ。だからこそ後ろめたくもあつて、よけいに腹立たしい。

頭を掻きつつ、さりげなく顔を向けると、運転席の向こうに降り立ったスピカが深々とお辞儀していた。

その頭が上がった時、おやと思つた。

額に赤い筋が一本。

そうか。私が倒れた時、指先の爪が当たつたのだ。

罪悪感が遠雷のように脳内をかすめた。気づくと、

我知らず、言葉が出ていた。

「そうだ、聞き漏らしたことがある」

「うかがいましょう」

後悔した。とくに聞きたいことなどない。しかたなく、

「——結局のところ、私の今回の行動は、コピードたちにとって期待はずれだったんだろうな」

「そんなことは」

「いや、きつとそうだ。私が装置を起動していれば、この世界に何らかの変化を及ぼしたはずなんだからな」とはいえ、ザ・デイに隕石によって破壊された原子力発電所に比べたら、はるかに小出力のあの原子炉でどれだけの効果が期待できたことや、大いに疑問だけ

どな」

スピカの顔を盗み見る。するとスピカは運転席のドアポケットに入れてあったハンドバッグに手を伸ばし、中を開いて、丸く薄いケースを取り出した。

「これを差し上げます」

それは磁気ディスクだった。

「ここにすべてが記録されています。開発した、あのかが亡くなられた時、胸ポケットに入っていました。それはオリジナルです。コピーは取っていません」

すべての記録。

一科学者の血と汗の結晶が、たった一枚のディスクに収まっているのか。

しかし――

「こんな大事なものを、私がもらったって、しかたがないだろう」

「いいえ。あなたが受け取ってくださいたほうが、あのかたにとつても本望でしょう。それに――」

スピカはひとつ頷くと、

「原子炉の規模に関するあなたのご指摘はもつともです。我々の調査班にも、その点を説明することはできませんでした。装置の内側は完全なブラックボックスになっているので、どうにもなりません」

「すると彼にとつて、あの場所での実験はあくまでも第一段階で、成功すればより大きな原子炉を使って、本格的な装置を作るつもりだったんじゃないかな」

「原子炉はスケールアップできても、隕石の代わりは不可能です」

「ああ、そうか」

スピカは私に近寄り、捧げるように両手でディスクを私に差し出した。

「それじゃ、記念ということで、ありがたく受け取っておくよ」

丁寧すぎるほど腰を曲げてお辞儀を繰り返したスピ

カは、愛車とともに、眩しい朝陽の中を帰っていった。私は公園を横切り、朝の早いコピードの老人たちに出会わぬよう、裏道を通って自宅へとたどり着いた。

玄関で靴を脱いだ瞬間、徹夜の疲れが一気に押し寄せてきた。私は居間に入ると、倒れるようにソファに身体を投げ出していった。

目覚めると、傾いた夕陽が閉じた雨戸の隙間から差し込んでいた。

グウと腹の虫が鳴った。動く気はしなかったが、空腹には勝てない。

悲鳴を上げる関節をなだめすかし、重い身体をソファから持ち上げた。すると、テーブルに放り出していた磁気ディスクが夕陽を反射して、キラリと目を射た。

とりあえず、冷凍庫から取り出したピザを電子レンジで温め、インスタントコーヒーを入れた。次に、ノートパソコンを書斎から持ってくる、キッチンのテーブルに、どかんと腰を落ち着けた。

ノートパソコンのトレイにディスクを挿入する。画面にファイル一覧が現れた。その中から、とりわけファイルサイズの大きなムービーデータを選び、ダブルクリックした。

画面に、画質の悪い映像が浮かび上がった。映ったのは、あの研究室だった。天井近くにカメラが設置されていたのだろう。広角レンズを使って、床のほぼ全面が捉えられている。

例の装置は今日と同じ場所に鎮座していたが、組まれた足場がその上にかぶさっているのが違っていった。よく見ると、装置の基部に、白衣姿の小柄な男がいた。どうやらメーターの数値を読み取るうとしているらしい。

しばらく動きがなかったが、突然、画面が激しく縦に震動した。「地震だ」という叫びが聴き取れた。

揺れる映像の中で、足場のひとつがガクンと傾いた。そこに載っていた金属製の通路が横滑りし、床に落ちていった。落下地点には白衣の男の頭がある。

悲鳴。折り重なる金属音。

揺れが治まった時、足場の下敷きになった白衣に動きはなかった。まばたきも忘れて見ていると、彼の白衣が徐々に赤く染まり始めていた。

再生を止めた。

ウィンドウを閉じ、開いた両手で顔を覆った。しばしの黙祷を彼に捧げた。

おそらくは即死だったろう。それが唯一の慰めか。手をどけると、戸外の光は失せ、部屋は真っ暗間だった。パソコンの画面だけが異様な光を放っている。私は立ち上がって、壁の電灯スイッチを押した。

それにしても、聞いていたのと実際に目撃するのでは、こうも印象が異なるものか。つい半日前に現場にいたせいで、よけいに衝撃の度合いが強いのだろう。いや、違う。

ショックを受けた最大の理由は、彼が私と同じ、人類だったからだ。

TVニュースでは、日々さまざまな事故による死傷事件が報道されている。被害者はどれも皆、コピードたちである。当然と言えば当然のことだ。

そんなニュースに接したところで、私はどんな感慨を抱くこともなかった。コピードの死は、たとえどれほど悲惨なものでも、動物園の動物が死んだという程度にしか感じられなかった。

だが、あの白衣の科学者は、まぎれもなく同胞だった。

ある時点では、彼と私は、地球最後のたったふたりの人類だったのだ。

ふうと息を吐き、呼吸を整える。

パソコンの前に座り直し、膨大なファイルのチェック作業を再開した。

科学者である彼がおこなおうとしていた実験。コピード出現の時と、真逆の状態を作り出すこと。私は知りたくなかった。

なぜ彼は、そんな研究に着手する道を選んだのか？ いったい彼は、どのような人物だったのか？

映像から察するに、彼もひとりりで装置開発に挑んでいたに違いない。もちろん、コピードに手助けを求められないといけない。あの時点なら、彼はきつとコピードの妨害を受けると考えたはずだから。

ふと、疑念が湧いた。

彼は生前、唯一の同士である私に対して、援助を求めようとはしなかった――。

なぜだ？

そこまで秘密主義を貫きたかったのか？

私は時間を惜しむように、次々とファイルを読み進んだ。ピザもコーヒーもすっかり冷めていた。

書類のほとんどは、装置を構成する部品の図面だったり、部品購入の見積もりや領収書だったりした。たまにあつても科学者自身の覚え書きのようなテキストファイルで、門外漢には意味不明の内容ばかりだった。それでも根気強く調べていくうちに、意外なメモを発見した。それは、彼が誰かと連絡を取り合っていたことを表したものだだった。

メールソフトの受信フォルダが空なのは、証拠を残さないよう、科学者自身が読み終えるたびに消していたのだろうが、さすがに覚えきれない事項があつて、ついつい書き残してしまつたらしい。

「M君、担当モジュールの動作確認、三日延長を要求」

「U君、起動パラメータμの下方修正、OKとのこと」

意味はやはり不明だ。しかし彼以外の人物（おそら

くは人類）の関与を裏付けるものといつていい。

装置の規模からして、素人目にも、とても単独でできる仕事ではないとは思つていたが。

などと考えていたら、さらに具体的なメモを発見した。

「U君、風邪でダウン。食事当番ローテーション、ずらす必要あり」

明らかに、彼のそばには、仲間がいたのだ。

ホッとすると同時に、反発を感じた。

私は彼らに「嫉妬」した。

なぜ彼は、私に呼びかけなかったのか？

食事の用意はできなくても、買い出しぐらいには役に立つことができたのに――。

ソファの背もたれに背中を押しつけ、深いため息をついた。

人類滅亡の土壇場まで、私は仲間はずれだったというのか。

3

ぐつたりとソファに身を預けていると、来客を告げる軽快なチャイム音が鳴り響いた。

起き上がる気がしなかった。それでも二度三度と鳴る音に急かされ、尻をソファから離れた。

部屋の隅に行き、壁に並んだボタンのひとつを押す。小型ディスプレイに玄関の様子が鮮明に映った。

隣家の少年だった。

「どうぞ」

少年は「お邪魔します」と元気に挨拶して入ってきた。

ちなみにこの時代、戸締まりの観念は世の中から一

掃されていたので、扉にも窓にも鍵はない。

「明かりが見えたから、帰ってきたんだと思つて」

はにかんだ表情で部屋をのぞき込んだ少年は、当たり前のことだが、スピカに瓜二つだ。姉と弟と称しても通用するだろう。人類の価値観でもつてすれば。

「夕飯、持ってきていいよね？」

「もうそんな時間だったか――頼むよ」

少年はそれだけ聞くと、元氣よくハイと叫んで、家を飛び出していった。何がそんなにうれしいのか、スキップするように飛び跳ねながら。

すぐに少年は、岡持に夕食を入れて戻ってきた。

「今夜はおじさんの好きな、レバニラ炒め定食だよ」と言いながらテーブルに並べてくれる。他にもサラダや冷や奴、小鉢の筑前煮なども混じつて、いつもより豪華だ。

それとなく理由を尋ねると、

「朝食に間に合わないつて、電話をくれたお姉さんが教えてくれたんだ。おじさんはきつとお腹ペコペコだともね」

やはりそうだったか。

食卓に付き、食事を始めたところ、いつもは用が済めば自宅に帰る少年が、今日に限つて、居間のほうを大きな目を開いて注視している。どうやらテーブルの上のノートパソコンに興味があるようだ。

世話になつているだけに、無下にはできない。

「触つてもいいぞ」

言うのと、少年はこれ以上ないほど瞳を輝かせて、パソコンの前にすつ飛んでいった。

少年が――コピードの全少年少女が――パソコンに対して並々ならぬ興味をもっていることは知っていた。ただ残念なことに、コピードらはコンピュータに関する能力に長けているとは、お世辞にも言えなかった。

だからこそ、少年は私のパソコン――極限までチューンアップされたF1カーのごときマシン――の

画面に見とれているのだろう。ファイルを恐る恐る開いたり、ソフトを起動するたびに驚きの声を上げていた。ソフトウェア制作会社勤務の経験のある私のパソコンだ。そんじょそこらのものと一緒にされては困る。「これは何？」

少年の指が画面をさしている。開いたままのディスクのウインドウだった。

「昨晚、私が体験した大冒険の、唯一の獲物だ」

少しばかりおどけて答えると、

「大切なですよ。閉じておいたほうがいい？」

「いや、単なるガラクタだよ。ひと通りチェックしたら捨てるつもりだ」

「ふーん」

少年はそれでも惹かれるものを感じるらしく、指先でポインティングデバイスを操り、ウインドウの中のファイルのひとつをダブルクリックした。

途端に、無意味な文字の羅列が、次から次へと画面に溢れ出した。

「わ、わ、壊れた！」

「ハハハ、違うよ、君が暗号化されたファイルを無理矢理開こうとしたから——」

私は言葉を切った。

不審に思った少年が、こちらを振り返った。

私は凍りついたように、ディスプレイに流れる文字の奔流をにらんでいた。

ポン。

間の抜けたパソコンの内蔵音が、事の終了を知らせていた。

私は椅子を蹴飛ばして立ち上がり、ソファを飛び越え、ノートパソコンの画面にかじりついた。少年が怯えた様子を示したが、それどころではなかった。

「こ——こんなことが！」

「どうしたの？」

問題のファイルは『解読不能』とネーミングされて

いた。

彼らは解読することができなかった。

すなわち、このファイルはコピードに発見されて以来、ずっと未開封だったのだ。

それがいま、解読完了を知らせるベルとともに、眼前にその内容が展開されていた。

事態の原因は明白だ。

私のパソコンには、数多くの高機能、高性能ソフトウェアがインストールされている。ほとんどが会社勤めの時に獲たもので、中には高機能過ぎて、公開すれば世間によからぬ影響を与える怖れのあるものまである。

少年がファイルをダブルクリックした時、そんなソフトのひとつ、暗号解読ソフトがまたまた起動したのだ。

「ねえ、どうしたのさ？」

少年はもう一度問いかけてきたが、私の耳は聞いていなかった。

ファイルに隠されていたもの。

それは、あの科学者たちの研究グループが、互いにやりとりしたメールの記録だった。

スクロールを試みる。途方もない量の文章が、そこには並んでいた。

気づくと、私は自分の名前で検索を掛けていた。

虫が知らせた。そうしか言いようがなかった。

そして——ヒットした。

4

私は、自分の名前の登場する前後の文章に目を走らせた。

彼らは計画を私に知らせるべきかどうかで議論していた。彼らの同士たちは、高齢で亡くなったり、最後は家族といることを希望したりで、櫛の歯が抜けるように、ひとりまたひとりと抜けていっていた。

だから、協力者はひとりでも欲しかった。

議論がなされた時期は、最後の彼が非業の死を迎える六年前のことだった。

この時点で仲間を彼を含めて、たったの三人。彼は外は八十代と七十代の老科学者だった。

そのふたりは、急いで私に計画の全貌を伝え、仲間として迎え入れるべきだと強硬に主張していた。彼らは自分たちが倒れたり、手伝えなくなったりする事態を怖れたのだ。

しかし彼は、最後まで頑として聞き入れなかった。

『我々と行動を共にした結果を想像してほしい。コピードに計画が発覚すれば、誰が後を引き継ぐんですか？』

肉声が伝わってくるような強い言葉だった。

私はすべてを理解した。

少年が帰宅し、私は風呂を沸かして入り、早々に床に就いた。

議論が交わされた後、わずか一年で彼は二人の同士を失った。ともに病死だった。

以後、彼はひとりであの研究施設で過ごした。

五年間。

たった数キロの距離に、人類唯一の相方がいたにもかかわらず、一切の連絡を取ることもなく。

さらに読み進むと、彼も物心がついてから、ずっと天涯孤独の身の上であったことが判明した。

私は彼に代わって、過ぎ去った年月に思いを馳せた。しかし彼が、最後の五年間をどんな想いで過ごしたのかまでは、ファイルは語っていなかった。

今日の日記はここまでとする。

明日、やるべきことが決まった。

今夜はぐっすり眠っておくでしょう。

二〇八六年一月四日

1

私は深い絶望の淵にいた。
なぜ、こんなことに――。

昨夜、眠りに落ちるまでは、今の私の状況を想定することなど不可能だった。昨日以上の緊張はあつても、すべてが事もなく運ぶものとタ力をくくっていた。
こんなことなら、昨日のうちに行動するべきだった。
後悔が津波のように押し寄せ、老いて疲れた心を激しくムチ打つ。

そもそも、今朝はいつもの朝食が運ばれてこなかった。
不審に思つて電話をかけると、留守番モードになっていた。窓から庭の柵越しにのぞいてみると、カーテンが細く開いていて、少年の母親の、困惑げな眼差しにぶつかった。
計画では、朝食後すぐに出かける予定だったので、すでに準備万端整っていた。

目的地。

もちろん、昨日訪問した研究所である。
考え抜いた末、私は装置を起動することを決心したのだ。

装置を作り上げ、この世界の有り様を変えるために半生を捧げた男。彼とは生前一度も会うことなく、言葉を交わすこともなかったが、それでも私は彼の意気に感じるところがあつた。
彼の費やした膨大な時間を無駄にしたくない。

彼の無念を晴らしたい。
心变わりの理由は、苦笑したくなるほど単純だった。

胸騒ぎを覚えた。

私は急ぎ、家を出ることにした。

服装は自分なりにきちんとしたくて、久しぶりにスーツに腕を通した。ワイシャツの襟がいささか変色していたが気にしない。一張羅のくたびれたコートを羽織ると、玄関の扉を開いた。

ところが、門から一步出たところで、待ち構えていた警官に呼び止められてしまった。

犯罪の消滅したこの時代、警察の機構自体が縮小し、彼らの姿を見かけることも珍しかったのだが。

「どちらに行かれるのですか？」

警官はもちろんコピーードだ。緊張感を全身にみなぎらせている。

背後にパトカーが停車していた。もう一人の警官が、視線をこちらに向けたまま、マイクに向かって何ごとか告げている。

「事件でもあったのか？」私はつとめて、ぎっくばらんな口調で問いかけた。「逃げ出した凶悪犯がこの辺りに潜伏しているとか」

しかし警官は、汗を浮き上がらせた顔で詰め寄ってくる。

「質問にお答えください。どちらに行かれるおつもりですか？」

日頃は温厚な顔しか見せないコピーードらしからぬ対応だ。もう一人もマイクを車内に戻し、近づいてくる。

隠すこともない。私は行く先を正直に口にした。ところが警官は大きく目を見張ると、両足を開いて私の前に仁王様のように立ち塞がった。

「すみませんが、外出はご遠慮ください」

「なぜだ？」

「申し上げられません」

丁寧な言葉遣いとは裏腹に、二人は並んで圧力をかけてくる。

ここに至って、ようやく私は勘づいた。

コピーードは方針を変えたのだ。

装置を起動させないことに、私が装置に近づくのを阻止することに決めたのだ。優柔不断な彼らは、一晩経つて怖くなり、方針を百八十度転換したのだ。

「どうか、お戻りを」

二人は間合いを詰めてくる。

私は肩をすくめると、

「分かったよ。家に入ればいいんだろ」

と笑いながら言ってみせた。

すると彼らもホッとして全身から力を抜くのが分かった。

その瞬間、私はアスファルトを蹴り、二人に向かつて突進した。

コピーードたちがアツと声を上げた時には、二人は道路に押し倒されていた。彼らの手を振り切った私は、速力を上げ、開いたままのドアからパトカーに飛び乗った。

幸い、エンジンはかかったままだった。

ドアを閉め、「待て」という声を背に、サイドブレーキを下ろすと、アクセルを踏み込んだ。

2

パトカーはウイーンと静かな音を立てながら、路上をゆっくりと動き出した。

コピーードが支配する世に移って、すべての車が電気自動車になった。ところがこの電気自動車、急発進ができない仕組みになっている。

震える手でハンドルを握りしめ、バックミラーに目を向ける。ぶざまに転けた二人の警官は、まだ尻餅をついたままだ。状況が理解できていないのかもしれない

い。

パトカーは速度を上げ始める。警官たちもようやく我に返つたらしく、立ち上がってこちらに駆けてくる。その二人の姿は、バックミラーの中でぐんぐん小さくなっていった。

危地を脱した！

じつとりと浮いた手の汗を、コートの襟にこすりつけて拭いた。腕の震えが止まらない。それもしかたがないだろう。コピードたちが待ち構えているなどとは、想像もしていなかったのだし。

パトカーを住宅地の出口へと向ける。研究所の近くまでは、片側一車線の国道の一本道だ。さいわい走っている車の数は少ない。こちらは久しぶりに運転するペーパードライバーなのだし、馴れないパトカーである。渋滞などは極力避けたい。

それに追っ手がすぐにかかるだろう。グズグズはしにいられない。一刻も早く目的地に到着しなければ。

一台のワゴン車が、前方を走っている。

回転灯を掲げ、サイレンを鳴らして前を空けるよう、他の車に知らしめればいいのだが、どのボタンを押せばいいのか見当もつかない。

こちらは全速力である。またたく間にワゴン車との距離が縮まった。

とりあえず警笛を鳴らした。コピードはのんびり屋なので、運転手は後方に対する注意が足りないのだろう。そうでなければ、ツートンカラーのボディに気づかぬわけではない。そう思ったのだ。

ところが一向に、ワゴン車を道を譲る気配がない。さらに警笛を鳴らすが、それでも動きがない。

驚いたことに、いつ現れたのか、別の四駆が対向車線をワゴン車と並ぶようにして逆走している。

そうか！

私は自分の読みの甘さに顔をしかめた。

意識下でつながっていると目されるコピードの連絡

網は、警察のみならず、すべてのコピードたちを動員して、私を包囲しようとしているのではないか。

背筋に刀身を当てられたような悪寒が走り、私は初めて恐怖を感じた。

ワゴン車と四駆がスピードを落とし始めた。こちらもブレーキを踏まざるをえない。

ワゴン車の前には、数台の車が間を詰めて走っているではないか。

イヤな予感がし、リアウィンドウに首をひねると、こちらにも別の車が、びったりと鼻面をくっつけているではないか。

やられた——。

いや、こんなところでやられるわけにはいかない！車はビジネス街のビルの間を走っていた。道に沿って、歩道がある。この時間帯、人通りはほとんどない。

南無三！ 私はハンドルを切った。

激しい揺れとともに、パトカーは歩道に乗り上げた。カフェの看板を跳ね飛ばし、植栽を蹴散らし、ビルの壁面をこすった。

スピードを落としてはならない。どうにかして、邪魔な車どもをぶっちぎらねば！

障害物だらけの歩道で、さらにスピードを上げる。ワゴン車や四駆は動揺を隠せず、次々に道端に停車していった。

振り向いて確認するところではない。狭い歩道を走り抜けるのに必死で、電話ボックスやポストといった大きな障害物を避けるのに精一杯だった。

道路に戻ろうにも、柵のように林立する棒杭と、渡された鎖によって仕切られていて不可能だ。

コピードたちの車が再び追いついてくることを考えると、スピードを緩めるのも得策ではない。

そうこうしているうちに、本道と垂直に交わる横道が棒杭の柵を切断していた。

抜けられる。

私はアクセルを踏み込んだ。

気が焦っていた。

だから、店から出てきた少女に気づくのが遅れた。

悲鳴——そして、衝撃。

心臓に絞られるような激痛が走った。

3

けたたましいスリップ音が空気を切り裂き、パトカーは尻を振りながら、まだ開店前の銀行のシャッターに正面から突っ込むと、どうにか停止した。ねじ曲がったシャッターとパトカーという特殊車輛のおかげで、私の受けた衝撃はハンドルに押しつけられた程度で済んだ。

電流供給が断線したのだろう、エンジンの駆動音は小さくなると、すぐに消えた。

シャッターから滴り落ちる朝露が、ボンネットの上で蒸気を上げている。私はまばたきもせず、その様子を呆然と見つめていた。

やってしまった！

生涯初めての人身事故だ！

私の人生は、最後の最後までケチのつきどおし、トランプの連続なのか！

ため息をつきながら、震える手でドアを開き、力なく車外へと降り立った。

振り返ると、タイヤの跡の向こうに、数人の人だかりがあった。その中央に十代半ばと思しき少女が横たわっている。彼女の手足はあらゆる方向にねじ曲がっており、すでにこと切れていることは明白だった。

即死だったろうか。囲みの間からのぞく彼女の唇から、一筋の血が流れていたが、表情からは苦悶の痕がうかがい知ることではできない。

亡骸を囲んでいるのは、彼女の家族たちだろう。壮

年の男女が一組と、年端の行かない男児。

せめて詫びよう。他にどうすることも思いつかない。

二歩、三歩と引きずるように足を動かす。

父親らしき男のそばに立った時、男はむせぶように泣いていた顔を上げて私を見た。妻も息子もそれにならった。

同じ、顔、顔、顔。

年齢も性別も身長も異なるが、目や眉や口の形、鼻の高さ、それら造作の配置バランス。すべてが神のいたずらによつて複製されたものだった。

長年、世の中との関わりを断ってきた私は、古いビデオ映像で昔の人類の様子を鑑賞することに執着するあまり、この街で生活を営む住民がすべてコピードであることを、この瞬間においてさえ、うかつにも忘れていた。

私は詫びようとした当初の気持ちを忘れ、並んだ顔とわずか1メートルの距離で対峙した。

奇妙に感じた。

どの瞳からも、憎しみや怒りといった感情が伝わってこない。まるで娘の命が奪われたのは天災のせいだといわんばかりに、ただ悲しみだけがそこにあった。

『コピード——心優しき新人類』

『文字どおり、地上に降りた天使たち』

そんなフレーズが、コピードたちが出現して間もない頃、雑誌を賑わせたことがある。

『人類の究極の進化形である！』

そう評し、手放しで礼讃した宗教関係者たちもいた。息絶えた少女を取り巻く家族たち。

彼らにとつて、私は仇であり、殺人者であるはずだ。娘の命が奪われた恨みを込め、怒りに震えながら突っかかってきたとしても不思議はない。なのに——。

父親がふつと視線を逸らし、抱き上げた娘の肩に顔を埋めた。母親や弟らしき男児も、涙を落としながらがつくりとつむいた。

その時だった。

いま思い返しても理解できない感情が、私の身内に湧き上がってきたのは。

私は感情がほとぼるままに、行動に出た。

なんと、父親の背中を、力いっぱい蹴りつけたのだ。「この野郎！」

父親は娘を両手に抱えて、前に転がった。母親も彼に押された形で路上に倒れる。アツと驚いた息子の頬を、次の瞬間、私はこぶしで殴りつけていた。

「貴様らなど、人類どころか霊長類でもない！我々より進化した生物のはずがない！ ない、ない！ ないんだ！」

横たわった父親の脇腹に、さらに蹴りを叩き込んだ。「娘をむざむざ殺されて悔しくないのか！ 悔しかったら、恨み言のひとつも叫んでみる！」

私は父親の後頭部を、グリグリと靴の裏で踏みつけた。

母親は、涙に濡れた顔を、ただ左右にするばかり。

息子は殴られた頬を押さえながら、母親の膝にしがみついていた。

「何なんだ、これはよ！ 少しは怒れよ、怒れよ！」

父親に暴行を加えながら、激しく憤っていたのは私自身だった。どうしようもなく腹が立っていた。

それでも彼らは無抵抗の姿勢をやめない。

ひたすら黙って、私の仕打ちに堪えていた。

4

無反応な者を攻め続けることが、これほど体力を要するとは想像もしていなかった。私は足を持ち上げるのもつらくなり、それでもムキになったあげく、バランスを崩して、バツタリと地面に転倒してしまった。

年齢には勝てない。老いた身体を恨みつっ、それでもコピードの親子をにらみつける。彼らは相変わらず

丸く縮こまったままだ。

ひたすら専守防衛。いや、防衛すらしていないではないか。なされるままなのだ。

違う。私はハツとした。

父親はやられているようで、常に妻や子の盾になるよう動いていた。現に今も、私と妻子の間に巧みに割って入っている。その姿は、天敵から雛鳥を守る親鳥を連想させた。

私は、彼らの世界の和を乱そうとする一匹狼。そう、一匹狼の極悪人でしかない。

コピードに支配される世界で、私は異分子であり、さらにはいえば、害悪をもたらす病原菌でしかないのだ。少女を轢き殺し、暴行の限りを尽くすような——。

「おい」倒れたまま、私は父親に声をかけた。「お前たちは、どんな指令を受けた？」

「——し、指令？」

父親は両手を頭から離すと、小さな声で答えた。なんだ、しゃべれるじゃないかと思いつつ、

「私の行動を邪魔せよという指令だ。今日になって方針がひっくり返った理由は？ テレパシーで受け取ったんだろ？」

すると父親はおずおずとうなずき、

「正確には、朝のテレビニュースで広報されました。

テレパシーであまねく伝えようとすると、発信者は命にかかわるほど体力を消耗しますので——」

「そんなことを聞きたいんじゃない！」

一声叫ぶと、父親は首をすくめ、路上に倒れた姿勢のまま続けた。

「現在のコピードが、その弱い生態系ゆえに、極めてひ弱な種族であることはご存知ですね？」

私はうなずき返した。スピカから聞いた。

「例の装置をあなたが稼働させれば、この問題を解決することができるかもしれない。ただ、原子炉の小規模なことを考えれば、世界全体に影響を及ぼすことは

不可能と予測されます。それでも解決の糸口くらいは、発見できる期待が持てる。昨日まではそんな意見が大勢を占めていました」

「それがなぜ？」

「昨夜、あなたと接触した者が、新たな見解を皆に呈示したのです。装置を稼働しようとするれば、内部に乗り込まねばなりません。するとあなたは確実に被爆し、命を危険にさらします。そんなことまでして、貴重な逸材を失うわけにはいきません」

「つまり、最後の人類としての希少価値を再認識したってことだな」

「そうです」父親はうなずく。「生物学的、心理学的にも。そして文化的にも」

文化的だと？ 心当たりはないが。

「だから、あなたが心変わりして装置に近づくようなことがあれば、阻止すべし、と」

「そうか——で、あんたらがここにいたのは？」

「ああ」父親は背後の路地を振り向き、「この先に我々の住むマンションがあるのです。あなたと鉢合わせしたのは偶然でした」

父親は説明を終えたとばかり、再び悲しみの顔に戻った。

私はゆるゆると立ち上がった。なぜなら遠くからサイレンの音が近づいてきたからだ。能天気な警察も、いよいよ重い腰を上げたのだろう。

男の妻は、娘の亡骸に寄り添いながら、指で髪を梳いていた。そばでは息子がぼんやりとそれを眺めている。

「行くのですか？」

男が問うてきた。

「ああ」

「どうして？」

それには答えず、「娘さんにはもうしわけないことをした」と早口で言うと、あとは振り返らずに駆け出

した。

私は前進することを、あらためて決意した。

しかし、さらに過酷な運命がその先に待っているとは。

絶滅した人類に愛想を尽かし、八百万の神は、ことごとく地球を去ってしまったのかもしれない。

5

ビル街にこだまするサイレンは、包囲の輪を着実に狭めていた。

私は手近な駐車場に侵入すると、一台の車のドアを勝手に開けて乗り込み、エンジンをかけた。

アクセルペダルに置いた足が、まだ震えている。

少女の顔が脳裏から去らないせいで。ハンドルを握ると、両腕までもが小刻みに震えていた。

こんなことでどうする！

パンツと頬を張って気合いを入れ、カーナビ画面に目的地の研究所を出す。ここからだ二十分ほどで行ける。

駐車場の出口は、好都合にも裏通りに面していた。

それでも、まばらに行き交う歩行者は、すぐに私だと気づいたようだ。こちらを指さし、驚いた顔をしている。

すぐに〈指名手配〉がかかって、この車も報告されるだろう。先を急ぐしかない。私は腹をくくってアクセルを踏んだ。

表通りに出たところで、速度を上げた。

窓ガラスを下ろして外気を入れる。一月の朝の冷気が車内にたまった息苦しさを一掃してくれた。

ホッとする間もなく、さらにスピードを速めたところで、前方に渋滞する車の列を発見した。

やられた！ 検問だ。

ドツと冷や汗があふれ出た。

右足がアクセルペダルから離れた。が、ブレーキをかけようとして、それを思いとどまった。

たとえ横道に逃げたとしても、別の検問に引っかかるのは時間の問題だ。ならば——突破するしかない。

歩道は警察の装甲車が塞いでいた。

私は、車の列とパトカーの間にある隙間に狙いを定めた。一台が通れるか通れないかの幅だ。

車は私の意思が乗り移ったかのように、一本の矢となって狙ったポイントに突入していった。

いち早く私の接近に気づいた警官もいたが、すでに遅い。

形ばかりのバリケートを時速八十キロで跳ね飛ばすと、弾丸となった車は検問のあいだを見事にすり抜け、そのまま一直線に駆け抜けていった。

バックミラーをのぞく。右往左往する警官たちの姿が、アツという間に小さくなっていった。

よし。こうなったら、目的地まで全速力で突き進もう。信号もすべて無視しよう。

そう決心した時だった。

前方の信号が青から黄色に変わった。もちろんスピードは落とさない。

ところが、何を間違えたか、横断歩道にスルスルと歩き出した人影があった。

あわててクラクションを鳴らす。

そんなことにおかまもなく、人影は道路の真ん中に立ち止まるとこちらに向き直り、両腕を開いてみせた。

「どういうことだ？」

距離がどんどん縮まる。

横断歩道の人物は、スーツ姿の、何の変哲もない成人男子だ。警官ではない。なのに、なぜ？

さらに距離が狭まる。回避するなら、また歩道に乗り上げるしかない。

ところが驚くべきことに、彼の他にも、さらに数人のコピードが現れ、左の歩道から右の歩道まで、全員が両腕を広げて、とおせんぼしたではないか！
通り抜ける隙間などない。

だが、すでにブレーキを踏むポイントは過ぎていた。返す返すも分らない。

あの時、私はなぜアクセルから足を離さなかったのか。
ハンドルを切ろうとしなかったか。

車は中央の男に向かって、吸い寄せられるように近づいていった。

「うわあああああああああああああああああつ」
私は、あらん限りの大声で叫んでいた。

声帯が焼き切れるのではないかと思うほどの声で。こんなこと、夢であつてくれ。

そう願ったのも一瞬だった。
ゴツンッ。

車を襲った震動音と衝撃とが、そんな願いも虚しく吹き飛ばしてしまった。

それでも、私はアクセルを踏み続けた。
スピードを緩めるのが恐ろしかった。

彼らが追いかけてくるような気がしたからだ。
だから後ろを振り向こうとも、バックミラーをのぞき込もうともしなかった。

そして。

私はまだ叫び続けていた。
叫んでいないと正気を維持できない予感がしたのだ。

しかし。
これが夢であつたとしても、悪夢はまだ終わりを告げてはいなかった。

猛スピードで駆ける車の前に、立ちはだかる人影が、またしても現れたのだ。

今度は横一列ではなく、数十人のコピードたちは、

ぞろぞろと路上に出てくると、思い思いの場所でふぞろいに立ち止まったのだ。

間をすり抜けるなど、不可能だった。
すぐに私の頭は右足に対して「ブレーキだ、ブレーキを踏むんだ」と命令を送った。

だが、右足は動かなかった。硬直した筋肉は、私の命令に背いた。

暴走する野獣となった車は、両手を広げたコピードたちを次々とその毒牙にかけていった。

6

あの時のことを事細かに書くのはもうやめよう。でないと気が変になりそうだ。

逆に、正気を失うこともなく、よくここまでやってこれたものだと思う。私はほとんど無意識のうちにハンドルを操作していた。車に対する衝撃が繰り返されるうちに、思考も感情も麻痺していったようだ。

イカン、書くまいと誓ったばかりではないか！
私は乗せていた額をハンドルから引き剥がし、真っ赤に染まったフロントウィンドウの向こうを見やった。

研究所のある大学の正門。

門の前には、これまで以上に頑丈そうなバリケードと、数十人の警官の群れが、私一人の相手をせんと、手ぐすね引いて待ち構えていた。

最後の関門である。

計画では、車ごと強行突入するつもりでいた。しかし予想外の事態がそれを不可能にした。ガス欠ならぬ電池切れである。

車は正門までおよそ百メートルの距離を残し、沈黙した。

私はサイドブレーキを引き、シートベルトを外すと、ドアをゆっくりと開いた。

正門に陣取っていた警官たちが、一斉にどよめくの

が分かった。

さらに私の姿を認めると、全員が「おお」「うう」といった意味不明な声を発して、全員が同じ動きで反った。まるでコントのように。

物心ついたところから、犯罪のない世界に生きてきた彼らだ。体裁だけ警官になったところで腰抜けぞろいだ。怖くもない。

だが、数の上では圧倒的に不利である。その気になれば、たちどころに逮捕されるだろう。

それでいい。
私も、もう十分にくたびれた。

残っていた最後の闘志は、車の前に身を投げ出したコピードたちによって、ズタズタに引き裂かれてしまったと言つていい。

醜く歪んだ車のボディがそんな私の心模様を反映している。ボンネットはいびつにへこみ、流れるような赤黒いしみが全体にこびりついていた。

ズルッ。ズルッ。

足を引きずりつつ、私は前進を開始した。
今さら逃げるなど考えてもいない。

最後の一人として、人類の意地と誇りを見せてやる。そんな気持ちはどこかにあったのかもしれない。

さらに前に出る。

武器もない。腕を振り上げる気力もない。声を張り上げようにも喉はカラカラだ。一張羅のコートはいつの間にか脱げ、スーツもあちこちが擦り切れている。

唯一の持ち物であるリュックだけは、ずっと手放さず、今も左肩にかけている。

頬に冷たいものが触れた。雪だった。
空を見上げる。

不気味なほど無彩色の雲が厚くたれ込めていたが、舞落ちる雪の粒は、神々しいほど白く美しかった。

私はうれしくなって、頬をゆるめた。

やるだけのことはやったぞ。

今でも人類代表などと気取るつもりはさらさらない。ないが、私の小さな抵抗は、装置完成を目前に死を遂げた、あの非業の科学者の業績と並び、軟弱なコピードの記憶に残るんじゃないかな。残す気があればだ。

何をとりとめもないことを。

苦笑いして一歩前進した時、心臓を締め上げるような激痛が走った。

たまたまに腰が砕ける。

悪寒が全身を駆け回った。

長年の引きこもり生活が祟ったな。この数日の無茶な行動が追い討ちをかけたのだ。

私は生まれつき心臓が強くない。だからスポーツを楽しんだ経験がほとんどない。友達ができなかった理由はそんなところにもあった。

頭からすーっと血の気が引いていく。

私は仰向けになって地面に倒れた。

顔に粉雪が降り積もる。その一粒一粒が体温を奪っていく。

もういい。このままあの世に行けたらいい。無料で同じ顔をした警官どもに連行され、寒い留置場で息を引き取るより、はるかにマシだ。

「しつかりしてください」

ふいに女の声が出た。

目だけを動かすと、明るい空をバックに、私の顔のぞき込む華奢なシルエットがあった。

「君は？」

「スピカです」

驚いた。ここで彼女と再会できるとは、想像も期待もしていなかったから。

スピカは細い腕で私の肩を持ち上げると、警官たちに向かって、すぐに担架を持ってくるよう指示した。

「しばらくお待ちください。すぐに研究所の中へお連れ

れしますから」

私は耳を疑った。

「待て——君の好意はうれしいが、許されるわけがない。私は何十人ものコピードたちを轢き殺した殺人鬼だぞ。逮捕を邪魔すれば、君も公務執行妨害で——」

「お気遣いなく」

スピカはにっこり笑うと、

「あなたは罪に問われません」

「しかし現に、私は車で——」

「道路に飛び出した者たちがいけないのです」

彼女は意外なことを口にした。私は絶句したまま、

彼女の次の言葉を聞いていた。

「それから、あなたを装置に近づけるなという命令ですが」

「……………」

「撤回されました」

「撤回？」

どういうことだ。ワケが分からない。

まさか、例の優柔不断病が高じて、またもや彼らの判断がひっくり返ったとでもいうのか？

スピカは私の心を読んだように、

「判断が二転三転して、軟弱の上ないとお蔑みのことでしょう。でも今回は違うのです。一口に言えば、状況が変わったのです」

そこまで言うと、やってきた担架に私を乗せるよう警官らに指示した。そして横たわった私の耳に口を寄せ、

「続きは研究室で。秘密を要することですので」

唇に指を当てたスピカは、ついと、さあらぬ体で、動き出した担架から離れた。

7

私が担ぎ込まれたのは、前日に寝かされた保健室

だった。

警官たちはひと言も言葉を発しないまま、私をベッドに横たえさせるとすぐに消え、入れ替わりに医者と女性看護師が入ってくると、私の腕に点滴を打ち、てきぱきといくつかの医療モニタを接続すると、彼らもたちどころに消え去った。

部屋はしんと静まり返った。外部からの音も聞かえない。まるで無人の構内にひとり放り出されたような

気持ちになる。まさか本当に誰もいなくなったのか？

疲れてはいたものの、極度の緊張で眠る気になれない。私の処遇はいつたいどうなるのか。罪を問わないだの、命令撤回だのと言ってはいたが。

首を横にして窓を見る。吹雪は一段と強くなっている。

手持ち無沙汰なので、今朝からのことを日記に記すことにした。両腕を支えにして上半身を起こし、テーブルのリュックを引き寄せる。

ひと通り、書き記したところで、ノックの音がした。どうぞと声をかけると、入ってきたのはスピカ一人だった。

「話し声が聞こえましたが、どなたかと通話中だったのですか？」

「携帯電話は持ってない。持っていないも話し相手がないからな。しゃべっていたのはこれだ」

私は日記帳を示した。

「それは？」

「トーク・ダイアリー。バッテリーで動く電子日記帳だ。マイクで吹き込んだ声を文字に変換する仕組みになっている。ソフトウェアは私が以前勤めていた会社

製だ」

「見たことはありません」

「商品としては全くヒットしなかったからな。おかげで会社は在庫を多数抱えることになった。私が製品化前に作成した市場調査レポートの数字を誤記したせい

でね」

「もしかして、それがあなたの」

「退社する引き金になった一件だ」

トーク・ダイアリーの液晶画面を見せる。筐体は片手に入る大きさなので画面もかなり小型だが、ダイヤルを回して画面をスクロールすると、たった今の私とスピカの会話が文字化されているのが見て取れた。

「しゃべったままが文字になるんじゃない。使い慣らせば、ユーザーの個性に合わせた文章にまとめあげる機能を持っている。どうだ、優れモノだろ？」

スピカに手渡すと、感心したように見入った。

「製造中止が決まり、あんまり悔しかったから、しばらくは個人的に使っていた。ところが家に引きこもってみると、とりたてて書くような出来事もなくてね。戸棚の奥で眠ってたのを、この元日に引っ張り出してきたってわけだ」

言葉を切る。スピカは空気を読んだらしく、トーク・ダイアリーを私に返すと、状況をご説明しますと言って、姿勢を正した。

「つい一時間ほど前に、WHOから極秘情報が入ったのです。それによりますと、原因不明の伝染病によって、欧州各都市では多数の死者が出ており、現在もすごい勢いで犠牲者を増やしているとのこと」

「伝染病だと？ どんな病気なんだ？」

「詳しくは分かりませんが、脳をやられるのだそうです。感染すると意識を失います。そして三日間うなされた後、たいていは死に至るのだとか。五日前にパリで最初の犠牲者が現れてから、すでに十数人が命を落としたのだそうです」

彼女は淡々と説明しているが、初耳の私はたまったものではない。五日で十数人もかとおぼやくと、スピカは首を振り、

「それはヨーロッパの話です」

「という？」

「発生源はアフリカなのです。アフリカ中部の中規模の都市でした。ご存知かもしれませんが、アフリカには現在ほとんどコピードは住んでいません。その街には、たまたま資源調査のため、数千人が暮らしていたのですが、二週間前、街は潰滅しました。この病気が原因で」

なんと！

「知らないぞ、そんなニュース」

「知らなくて当然です。報道規制がなされ、コピード間のテレパシー伝達も遮断されていましたから」

「そんなことができるのか？」

「はい——そうしないと、気の弱い我々はパニックを引き起こし、世界的な停滞が起こりかねなかつたから、というのがWHOの説明です。発生源を隔離し、はっきりした対策が立てられるまで発表を控えるつもりだったそうです。もちろん私も先ほど聞かされるまでは全く知りませんでした」

「で、対策は立ったのか？」

私は身を乗り出して尋ねた。

「いいえ」彼女はまた首を振り、「ワクチン研究はまだ緒に就いたばかりです。それどころか、伝染病の感染経路について恐ろしいことが判明したのです。この病気は、空気感染するのだそうです。簡単に風に乗って飛んでいくのです」

何ということだ。想像するだに身震いがする。

ということ——私は頭をフル回転させた。

「発生源の街を隔離したにも関わらず、ウイルスは風に乗って地中海を越え、欧州で発症者を出してしまつた？」

「はい」

「つまりこれは、君たちコピードが以前から最も懸念していた事態だな？」

スピカは顔を曇らせてうなずき、

「伝染病はまるで、我々を手当たり次第に撫で斬りに

する勢いで広まっています。WHOの見解でも、このままでは数年で地球は無人の星になるだろうと結論づけていました」

さもありません。

いよいよ私は核心部分を口にした。

「私に対する命令が突然撤回された理由も、そこにあるんだな？」

するとスピカは勝手な理屈ですみませんと腰を折って謝った。

「いや、おかげでまあ、助かったんだが」

でなければ、今頃は冷たい留置場の中だ。

「それに撤回命令には——装置を起動させろという別の命令もくっ付いてるんだらう？」

「お察しの通りです」

スピカはまた頭を下げた。

「それじゃ、すぐに行こうか」

そう言っただけだとすると、スピカは三度頭を下げて、すみませんと蚊の飛ぶような声で言った。私はそれを聞き替えて、

「勘違いするな。コピードのためにやるんじゃない」あの装置を開発した科学者の努力を無にしないためだ。声に出して叫びたかったが、照れくさいのでやめた。

私は体調を気遣うスピカを押しやり、悲鳴を上げる足腰にムチ打って、どうにか自力でベッドを降りた。

点滴の針を抜き、上着を着る。

「忘れ物ですよ」

スピカが、ベッドの上のトーク・ダイアリーを取り上げた。画面には、ここまで彼女と交わした会話がしっかりと記録されていた。

私の頼りない足取りに不安を覚えたらし、スピカ

はどこからか車いすを調達してきた。「決戦の場」には堂々と歩いて臨みたかったのだが、心臓の状態は依然芳しくなく、立ちくらみが五分に一度は押し寄せてくる。あきらめてシートの上に腰をおろした。

「えらく静かだな」

ネクタイを締め直す私の耳には、周囲からコトリとも物音が聞こえてこない。

「構内にいる職員は私だけです」

「さっきの警官や医者たちはどうした？」

「退避しました」

「退避——万一の放射能漏れを警戒してか？」

「そうです。もちろん大学の外では、万全の備えをしたレスキュー隊が待機してはいますが」

「淡々とした口調に、私はハツとして振り返った。

「君はどうなる？ 私はやむを得ないにしても、君まで命を危険にさらすことになる」

「構いません。自ら進んで志願したのです」

「どうして？」

「誰かがしなくてはいけないことですから」

確かに、足許のおぼつかない老人にはありがたいことではあるが。

心優しきコピードの献身の精神か、はたまた冷徹な監視員ということか。

「しかし」考え考え言葉をつなぐ。「あの謎だらけの装置が、必ずしもコピードのピンチを救ってくれるとは限らないんだぞ。テストもない一発勝負だ。どんな目が出るか不安じゃないのか？」

「それはもちろん不安です。それでも、あえて楽観的に考えれば、装置がコピードの生まれた現象を逆に再現するのに成功して、コピードから再びあなたがた人類が生まれるかもしれないのです。ウイルスに十分対抗しうる、肉体的なバリエーションに富んだ人類が」

「悠長な！」私は吐き捨てるように叫んだ。「事態は急を要するんだろ？ こうしている間にも、百人、

二百人と被害者が続出してるんじゃないのか？」

「現在、世界中の科学者が緊密に連絡を取り合いながら、ワクチン開発に全精力を上げて取り組んでいきます」

「だろうな。まあ、このままコピードが死に絶えようがどうしようが、私の知ったことじゃないが」

スピカは押し黙り、しばらくは廊下を進む車いすのホイールが回る音だけが聞こえていた。

研究室の扉の前に到着した。スピカは胸元からカードを取り出し、壁に差し込んでキーを解除すると、車いすを押しして中に入った。

室内は昨日と変わったところはない。昼間のせいで、窓からの光が、部屋を明るくしているくらいだ。

私を部屋の中央に残し、スピカは装置のスイッチを入れて準備を始めた。

静かな時間が流れる。

私も何か手伝おうかと立ち上がった時、スピカが背中を向けたまま話しかけてきた。

「先ほどあなたは、この役割を志願した理由をお尋ねになりましたね」

「ああ、誰かがやらねば、と」

「その理由はウソではありません。でももつと大きな理由——いえ、個人的な動機があったのです」

私は再び膝を折って車いすに腰かけた。

「聞かせてもらおうか」

スピカは手を止め、宙を見上げた。

「私の両親はコピードではありません。あなたと同じ、いわゆる人類でした」

最初のコピードが生まれたのは五十年ほど前。彼女は二十代だから、ありえることだ。

「長い間、両親はコピードを嫌って、一子供を作るまいと思っていたそうです。ところが日々増えていくコピードの子供たちを見るにつけ、どうしても血を分けた子が欲しくなり——その結果、私が生まれたので

す」

そんな人類の夫婦もいたのか。

「父母はコピードの私を大層かわいがってくれました。それでも、ふたりの心の中にひそむ《この子がコピードでなかったら》という思いは常に感じていました。だから私はずっと父母に対して、申し訳ない気持ちでいっぱいでした」

返す言葉がない。

彼女はこちらを向き、髪をかきあげながら力なく笑うと、

「これがこの役目を選んだ、個人的な動機です。——人類のかたがたは、あまり気づいてないようですが、外見も性格もそっくりなコピードたちも、その父母や生い立ちは違ったりするんですよ」

9

最終チェックを終え、準備が整ったのは一時間後だった。

巨大な装置の外周にある階段を昇ると、二階の高さにクレーン車の運転席のような丸く囲われた部屋があった。これから私の入る場所であり、装置のコントロールはその部屋からしかできない。

「装置が始動すると、何が起るのか全く分かりませし、途中で停止させることも不可能でしょう。私は外からできる限りの援護をしますので、これをどうぞ」

スピカはそう言つて、私の頭にカメラ付きインカムを取り付けた。

「では、行ってくる」

決意を込めて、私は階段を昇り始めた。

胸ポケットには、トーク・ダイアリーをオンにした状態で突っ込んでいた。

原子炉の円筒壁を右手で撫でる。ふと視線を上げると、上方にペンキの剥げ落ちた痕があり、醜くへこん

だ箇所があった。

「崩れた足場が当たったのです。装置には支障はないと思いますが」

「あつてもなくても、いまさら実験中止などできるもんか。どの道、この装置が期待した成果を上げてくれるかどうかも分からない大博打なんだからな。」

「そうだ、まさしくこれは〈実験〉に他ならない。予測不可能な実験。」

円筒形のコントロールルームに到着した。外側には窓らしきものはなかった。

扉を開けると自動的に電灯のスイッチが入った。中には真ん中に座席が一つきりで、人ひとりがせいっぱいの、恐ろしく狭い空間だ。

入口に足を掛け、気合いもろとも、身体を中に押し込んだ。

いよいよである。

緊張に足が震え、額を汗が流れる。

「操作は至って簡単です」スピカの声が階段下から登ってきた。「扉を閉めると目の前のディスプレイが灯ります。あとはそこに現れるガイドに従ってください」

私はうなずくと扉を閉めた。すかさずディスプレイが明るくなり、次の一文が浮かび上がった。

〈右手の人差し指をセンサーに当ててください〉

言われるままに指を載せる。

はて、私の指紋がいつ採取されたのか？

疑問はすぐ氷解した。地球上のコピードは全員同じ指紋である。違う指紋の持ち主がいれば、他ならぬ私なのだ。

画面が変わった。

〈映像を読み込み中…〉

緊張は最高潮に達した。頭頂から足の爪先まで、心臓の鼓動が波のように行ったり来たりするのが分かる。

突如、画面に人の顔が現れた。

「スピカ、見えてるな？」

「マイクに話しかけると、はいとインカムから返事があつた。」

「装置を開発した男だな」

『そうですね』

白衣姿の画面の男は、しばらく自分に向けられたビデオカメラを調整していたが、やがて姿勢を正すと、おもむろに語りかけてきた。

彼は最初に私の名前をフルネームで呼び、続いて自分の名前を口にした。

〈これは、何らかの事情で僕がこの場にいないケースを想定して撮影している。僕の計画がコピードに露見した場合か、あるいは僕が生きていないか——〉

映像の下には、日付と時間が表示されていた。

『彼が事故死する前日です』

スピカが補足した。

彼は私にメールを送った理由をひととおり説明した後、装置開発に込めた意図を明らかにした。

〈僕はコピード研究に半生を費やしてきた。残念ながら力及ばず、その発生の原理を科学的に解明するには至らなかった。それでもこの装置の完成にこぎ着けたのは、運が良かったと言うべきだろう〉

胸を張った彼の髪はぼさぼさで、無精髭も伸びるにまかせていた。頬はこけ、眼を縁取った隈は痛々しいほどだ。ただ、眼の奥に宿った光だけは生命力に溢れていた。

〈この計画を進めるにあたり、数少ない人類の仲間である君に黙っていたことを許してほしい。君にはあくまで、我々が倒れた時の《保険》でいてほしかったんだ〉

分かつてるよ。そう伝えられたらどんなにいいか。

ほんの一瞬、映像にチラッとブレが生じた。

「どうした？」

マイクに口を寄せて聞くと、数秒の間があつて、

『分かりません。装置の電源供給には、特に問題はないうのですが』

〈——それでは操作の説明を始めよう。といつても君のすべきことは、さほど多くない。まずはディスプレイの前にあるキーボードのENTERキーを押してください〉

言われたとおりにする。するとコントロールルーム全体がガタンと揺れ、移動するような感触とともに、大きな振動音が鳴り始めた。

『あつ』

「どうした！ 何が起こった!？」

『本体の壁面が左右に開きました。コントロールルームを丸ごと飲み込もうとしています』

私の身体の毛穴という毛穴からドツと汗が噴き出した。原子炉の中に引きずり込むつもりか。

震動は一分ほど続いた。

その間、映像はストップしていた。やがて終わりを告げる音がして、振動音は消えた。

『——ご無事ですか?』

インカムから緊迫した声が出た。

『ああ、大丈夫だ。外はどうなってる?』

『あなたが入った後、壁はぴつたりと閉じられました』

「くそつ、最初から虜にするつもりだったんだな。予告もせずに——何て奴だ!」

腹立ちを拳に込めて壁を叩いた。するとそれがスイッチでもあつたように、再び映像が動き出した。

〈驚かせたなら謝ろう。今のアクションで君を装置の中に収納したわけだが、これからが本番だ。いよいよ、ザ・デイの再現——いや《逆》再現をおこなう。君は五十数年前に地球を襲った未曾有の災厄を、時をさかのぼりながら体験することになる。ただ人工的に引き起こすためには、どうしても原子力エネルギーが必要だった。だからこれから君はかなりの量の放射能を

特殊な形で浴びることになる。もし君が心臓に持病を抱えていたりすると、命を危険にさらすことになるが、そうでないことを祈っている」

呼吸の止まる思いがした。インカムに私を呼ぶ声が響いた。

『実験を中止しましょう！ どこかに解除ボタンはありませんか！』

「いや——いいんだ」

私の口は、考えるより先に動いていた。

座席に深々と腰掛けて腕組みし、憎らしい科学者の顔をしげしげとにらみつけ、

「さてと、次はどうするんだ？ このマッド・サイエントティストさん」

「君がこの場ですることは、以上で終わりだ。——そう言えば不思議に思うだろう。たったこれだけでコピード支配の世の中をくつがえすことができるのか、と」

彼の表情がいくぶん引き締まった。重要なことを告げようとしているらしい。

「この研究所でのことは、じつは実験の前半分に過ぎない、といえど驚くだろう。そう、君にはここを出てからやってみてもらわねばならないことがある。それがおこなわれて、初めて実験は完結する。さて君のやるべきことというのは——結婚だ！」

彼が断言した瞬間、再び画面が激しくブレ出し、突然ブツリと映像が途切れてしまった。完全なブラックアウト。

あわててキーボードを叩いてみたが、彼の姿は二度と映らなかつた。

「どうした——おい、どうしたんだ！」

『大変です』

「スピカか、原因が分かったのか？」

『どうやら事故で足場が壊れた際、当たりどころが悪く、録音データのドライブに傷をつけてしまったよう

です』

「そ——そんな」

もはや何も語らない画面を、私は無駄と知りながら、

激しく手の平で叩いていた。

「教える、《結婚》しろとは何の冗談だ！」

10

地の底から轟くような低音が聞こえてきたのは、まさにその時だった。

閉じ込められた狭い空間。しかも原子炉を内包する巨大な装置の内部。まさにカゴの中の鳥だ。

不気味な音は、カーブを描くように音程と音量を上げていく。と同時に、電灯が消え、非常灯がコントロールルーム内をオレンジ色に染めた。

私はえも言われぬ恐怖に身体をすくませていた。覚悟はしていたはずだった。

もとより命が惜しいわけでもない。

なのに、装置を開発した科学者が残した言葉のせいで、予想外の動揺を与えられてしまった。

装置を起動するだけではダメなのか？

心臓に爆弾を抱えた私では役不足なのか？

その上、最後の謎掛けはいったい——。

壁も椅子も激しく震動し続ける。身体がひっくり返らないよう両手で壁を支えた。

ややあって、身体の内部分が変な違和感を感じ始めた。細胞の一つひとつが踊り狂うような奇妙な感覚。

たまらず、壁から手を離し、胸に当ててみる。

ぞっとした。手の平が皮膚を通り抜けたではないか！

目をやると、そんなことは起こっていなかった。だが自分を見つめる目さえ、どこか離れたところから見ているような気がする。

おかしい。五体と五感とが乖離している。

自分の身体であって自分ではない。そんなズレが刻々と広がっているのだ。

続いて、乗り物酔いに似た嘔吐感が襲ってきた。胃を激しく揺さぶるや、洗濯機のようにかき回した。

これでいいのか？

いいのだと信じるしかない。何が起ころうと。

最後までこの心臓がもつてさえくれれば。

今や目も耳もはるか遠いところに飛び去った気がしていた。そんな耳が、かすかな女性の声を拾った。

「スピカか？」

『ああ、やつとお返事があつた』

彼女の声はルームの中で乱反射し、頭の中をぐるりと一回りすると、桜の花びらのように舞い散った。決して比喩などではなく、本当にそう感じたのだ。

翻弄される嵐の中、私は彼女の声にすがりついた。

「スピカ、何でもいいから話しかけてくれ。でないと押し流されてしまいそうだ」

『な、何を話せばいいのでしょうか？』

「——そうだ、歌だ、歌を聴かせてくれないか」

突然の懇願に、スピカの返事はなかった。だが次に聴こえてきたのは、昔どこかで耳にした子守唄だった。

おやすみ おやすみなさい

ほら 夢のステージの幕が上がるよ

おやすみ おやすみなさい

ほら 月が光を弱めようとしてるよ

歌声は私に少年の頃を思い出させた。

誰の歌だったか、どこで耳にしたのか、まったく思い出せない。それでもち切れんばかりの懐かしさを帯びたメロディーだけは、今も鮮やかによみがえってくる。

眠りの丘は ふわふわ ならんか

眠りの川は さらさら ゆるやか
眠りの風は そよそよ おだやか
眠りのボウは もふもふ のんびり

ボウというのが何なのか、当時、その正体をめぐって議論が起こった記憶がある。結局のところ結論は出ずじまいだったが、あれはきつと、そうなることを見込んだ作詞者のいたずらだったのだろう。

「古い曲をよく覚えているな」
つとめて平静な口調で感想を述べると、
『幼少の頃、両親がよく歌ってくれたのです』
ピシッ。

心臓がひび割れるような音が耳に届いた。私は息を止めて、絶叫をどうにか耐えた。

「君は、ボウの正体は、何だと思う」

『カバじゃないでしょうか。のんびりと日がな一日水につかっついて』

「なるほどな。私は——」

ウシだと思おうと言おうとした途端、前触れもなくパーンッと大きな破裂音が脳髓を直撃した。

音は強烈な風圧を伴って、耳たぶを根元から引きちぎり、両腕を根元からもぎ取り、さらには両足をこなごなの肉片に吹き飛ばした。

飛び散った頭部を離れた両目は、部屋の壁に当たると跳ね返り、今しがたまで私が座っていた椅子の上のコロリと転がった。

二つの眼球が最後に見たのは、どこか懐かしさに溢れた光景だった。

ベッドで横になった少女。彼女の顔をのぞき込む両親。
そこには一点の曇りもない愛情があった。

私が生涯に一度も経験したことのない感情が、そこには満ち足りていた。

眼球はふいに湿気を帯びると、涙腺もないのに

そつと涙をこぼした。

なぜ涙が流れるのか。眼球には考えもつかない。それでもベッドの少女がスピカであることは確信していた。

人類がコピードに対して抱いていたのは、迫害や無視や蔑視といった負の感情だけではなかったのか。ふたつの《種族》の間に横たわる壁を、やすやすと越えていった者たちがいたのか。

——悲嘆にくれつつ消えて行った他の人類を尻目に、彼らは幸福な時間を持つことができた。できたのだ！
光景は黄色に染まっていた。懐かしさを感じたのはそのせいかもしれない。

親子は眼球の思いなど知ることもなく、互いに見つめ合っていた。ずっと——。

コントロールルームが再び姿を現した時、スピカは階段を駆け上がるや、急いで扉を開けようとした。しかし把手が異常なほど熱かったため、取りに戻ったハンマーを叩きつけ、ようやく開くことができた。

誰かが私の名を呼んでいる。

目を開けると言っている。

眼球だけになってしまったのは、開くまぶたもないぞ。

そうつぶやくと、目に指がかかるのを感じた。

パリパリと張りついたまぶたが押し開かれた。まぶたがあったのか。

さつと光が降り注ぐ。

研究所の天井の下に、のぞき込むスピカの顔。

「私は——私の身体はどうなった——手や足は——」

「見たところ、怪我はないようです」

「そんなバカな——」

肉体は爆発し、四散したのではないのか？

確認するべく首を持ち上げようにも、まったく力が入らない。スピカが後頭部に手を当てて助けてくれて、

両手両足が無事なことを知り、ようやくホッとできた。私は階段を降りたすぐの床に寝かされていた。
「装置は壊れました。動かせるのは一度きりだったようです」

「いや、一度で十分だ。こんな機械に二度も乗る気はない」

「でも、成果が得られたのかどうか」

「得られたさ」

私は不規則に脈打つ心臓を片手で押さえつつ、もう一方の手をスピカの手に重ねた。

スピカは戸惑いの表情を浮かべたが、すぐにそれを隠し、

「装置につながった計器を一通りチェックしましたが、外部には大した放射能漏れはありませんでした。もしかすると装置のどこかに欠陥があったのかもしれない。せつかくの苦勞が水の泡に——」

「実験は成功した」

私は力を込めて断言した。しかしスピカは眉を寄せて首を傾げた。明らかに私の正気加減を疑っていた。

「スピカ。結婚してくれ」

「……」

「イヤか？」

「いえ——あまりに唐突なので」

ドクン。また心臓を大きな津波が襲った。しかめた顔にスピカも気づき、

「痛いんですね。急いで保健室に行きましょう。医者も呼び戻します」

私はスピカの手を握って押しとどめた。

「そんなことより、返事をくれ。イエスカノーか」

「——イエス、です」

私は大きくうなずくと、身体から力を抜いて頭を床に横たえた。

「よかった——これで思い残すことはない」

「教えてください。分からないことだらけです」
あくまでスピカは食い下がる。

「ああ、説明するよ」

——グフッ。

限界だった。大津波がとうとう心臓のリズムを奪った。

私は目を剥き出し、虚空を睨みつけた。

「待て——もう少し時間をくれ——」

拳で胸を叩く。だが我が肉体のエンジンはついにその任から降りようとしていた。

「すぐに医者を呼びます！」

駆けて行こうとするスピカの腕を、私は離さなかった。

最後の力を振り絞り、彼女の耳に口に近づける。

「いいな——結婚だぞ——」

私の瞳に映った最後の光景は、目に涙をためたスピカの顔だった。

二二四年一月一日

新しい年が始まった。

日記を書こうなんて、これまで一度も考えたことなんてないのに。

ただ昨日、ちよつとした発見があったんで、年も変わったことだし、何か新鮮な気持ちで挑戦してみようかなと、まあ単なる気まぐれだ。

ボクの名前はミラク。

十七歳の男子。

家族は、父さん、母さん、それに弟と妹がひとりずつ。ボクを含めて計五人が一つ屋根の下に暮らしてる。

昨日の大晦日のことから書こう。久しぶりに集まった家族がその日一日かけてしたのが、大掃除だった。

父さんも母さんも仕事で留守がちだし、ボクはボクでバイトに精出す日々だったので、家のことを省みる者はおらず、掃除を始めたらびっくりするくらいゴミが出てきて、ホント、びっくりした。

人使いの荒い母さんには、塀や屋根の修繕まで頼まれ、午後はずっと雪の降り出しそうな寒空の下で、トンカチ片手に釘を打っていた。

ボクは野球部のキャプテンをしてるくらいだし、体力には人一倍自信がある。弟も妹もまだ幼いから、こんな時、肉体労働はいつもボクにお鉢が回ってくるんだ。まあ身体を動かすのは好きだし、寒いのも苦手じゃないからね。

それに今年、数十年ぶりに紅白歌合戦が再開される。早く終わって、ゆっくりと楽しみたい。

そんなこんなで気が急いだのは否定できない。屋

根の上を元気良く歩き回ってる最中、うっかり屋根を踏み抜いてしまったんだ。

築五十年の木造家屋だし、あちこち痛んでることは頭に入ってたんだけど。

中から点検するため、急いでハシゴを降り、二階から屋根裏部屋に上がった。さいわい、穴は天井を貫通してなかったんで、ボクはホッと安心した。もしもポツコリ穴が空いてたりしたら、母さんにぶつ飛ばされるどころだ。うちの母さんは気が強いから、怒鳴られた上に、飯抜き+紅白を見せない、くらいの罰は受けただろう。

とにかく外から穴を塞がなきゃ。そう思ってた部屋から出ようとした時、足の爪先がタンスに当たって小さな箱が床に落ちた。

気にせず行こうとすると、後ろから人間の声だったので飛び上がった。

へっぴり腰で振り向いたら、声の正体は床に落ちた携帯電話を薄くしたような機械だった。あとで聞いたら、トーク・ダイアリーという名前だった。

機械から流れてきたのは一組の男女の声だった。男は女に向かって息も絶え絶えにこう言った。

『結婚してくれ』。

その夜、母さんがボクに話してくれた。

声の主は、母さんの母さんと父さん、つまりボクのばあちゃんといいちゃんだった。

二人のなれそめについては、昔から知識としては知っていた。学校の歴史の教科書にも載ってるし。

でも、プロポーズしたときの肉声が残ってたなんて、今の今まで知らなかった。

そう言うとう母さんは笑いをこらえながら、

「スピカおばあちゃん、恥ずかしかったから、ずっと隠してたんだって」

修理も掃除も年が明ける前に終えた食卓には、一家

五人が集まって、じつと母さんの話に耳を傾けてた。

「みんな知ってるように、私のお母さん、あなたたちのおばあちゃんはコピードだった。ある時、偶然にもおじいちゃんとお会い、ふたり掛かりで人類を元に戻す実験をおこなったの。実験は無事終了したけど、それが元でおじいちゃんは死んでしまった。ふたりが出会った次の日のことだったのよ」

授業で習ったボクはすでに知ってたけど、弟や妹は初耳だったようだ。肉親のことだけに、目をらんらんと輝かせて聴き入ってる。

「おじいちゃんは心臓が弱かったから、実験に耐えられないことに途中で気づいたらしいの。それでも無理して続けたせいで命を落としたんだけど、最後の最後におばあちゃんにプロポーズしたのよ」

「なんでー」妹が声を上げた。「死んじやったら結婚できないじゃないー。お母さんも生まれてこないしー」

「生まれたから、ここにいるんじゃない」

「おかしいよー」

弟が加勢する。母さんはそんなふたりに微笑むと、「おじいちゃんの遺体はすぐ病院に運ばれたの。そしておばあちゃんの指示でおじいちゃんの身体から《子供素》を採ったの。それをおばあちゃんのお腹の中に入れて、おばあちゃんの《子供素》と合体したおかげで、こうしてお母さんが生まれてきたのよ」

「へー」

弟と妹はそれなりに納得したようだ。

ボクはあらためて母さんを見た。

母さんはザ・デイ以後に生まれた、初めての《人類》だ。

じいちゃんとおばあちゃんの実験は成功した。じいちゃんの精子はザ・デイ以前のものへと変貌したんだ。おばあちゃんはそのを受け入れ、妊娠し、母さんを出産した。

生まれた母さんは世界じゅうから喝采を浴び、祝福を受けた。再び、人類の時代が戻ってきたんだと。

その後、じいちゃんの精子は世界の至るところで新たな人類を誕生させた。つまり、母さんの異母弟妹はこの世にいっぱいいる。

でもさすがは人類。彼ら彼女らは顔つきこそどこことなく似ているけど、やっぱり全然違う。声も身長も体型も、それから性格も全然！

母さんは十九歳で結婚した。相手である父さんは真正銘のコピードだ。新人類の中には、コピードと結婚するのはイヤという人もいるけど、母さんは気にしない部類の人。

若い頃から豪快な武勇伝に事欠かない人だったらしく、今じゃ『新人類協会』の代表として世界中を講演して回ってる。コピードの父さんはのほほんとしたもので、そんな母さんのマネージャーとして、常に随行してる。早い話が尻に敷かれっぱなしなのだ。じつは父さん、生前のじいちゃんに会ったことがある。

独り暮らしのじいちゃんとは、ずっとお隣同士だったらしく、自炊ができないじいちゃんのために、父さんの母親が毎食作って用意したのを運んであげてたんだそうだ。

じいちゃんは子供には優しくして、時には大切なパソコンを触らせてくれたりもしたんだそう。

「さて」珍しく父さんが口をはさんだ。「お話中、申し訳ないけれど、そろそろ晩ご飯にしないかい」

「さんせー」

弟と妹が父さんの意見に同意した。

その夜、ボクは屋根裏で見つけたトーク・ダイアリーの声データを自分のパソコンへとコピーした。

もちろん母さんの許可は得ている。というか、データを扱いやすいよう編集して携帯用のマイクロディスクに焼きつけてくれと、母さん自身がボクに依頼したんだ。次の講演で使いたいらしい。

コピーしたデータを読み始めたら、紅白歌合戦のころなんかすっかり忘れてしまってた。それくらいじいちゃんの冒険日記には引き込まれるものがあった。

日記はたったの四日分しかなかった。トーク・ダイアリーのメモリは、残り九十九パーセントが未使用のままに残ってた。

そうだ！

残りのメモリにボク自身の日記を綴ろう。もしも許されるならば、だけど。

じいちゃんは、実験装置を開発した科学者と並んで世界中から尊敬される存在だ。もちろんボクにとっても鼻が高い肉親でもある。

そんなじいちゃんが愛用した道具に、その孫が日記を付けるなんて、古くさい言葉というなら、クールじゃないか？

そんなわけで、元日から日記がスタートした。

当面は三日坊主で終わらないよう、がんばるつもり。

そういや、じいちゃんの日記はいざ本にまとめて出版したい、なんて母さん言ってたな。

母さんは長年、新人類とコピードが仲良く暮らしていきける世界を目指して、さまざまな努力を積み重ねてきた。

新人類は日々増え続け、今じゃ十万人に迫る勢いだ。すでにあちこちでもめ事が起き始めている。もし大ごとになったりしたら、じいちゃんたちの苦勞が報われない。

今から来るべき世界のモデルを提案しておく必要がある。母さんはそのために日々、会議やテレビ出演にと奔走しているんだ。我が母親ながら、本当にパワフルだなと感心する。

アフリカから広まった伝染病は、全コピードの七割を死に至らしめ、ワクチンが完成する直前、世界は中世の暗黒時代を思わせるような様相だったらしい。

新たな人類の誕生を知った時、コピードたちは、自分たちがこの地上から消え去る運命にあることを天命として受け入れた。彼らには新人類と争ってでも種を残そうなんて考えはまったくなかった。

その上、コピードたちは世界の再建に向けて、ボクたち人類に力を貸してくれさえした。新人類が増えることにも平然と対処し、まだ幼かった新人類をあらゆる面で優遇してくれた。こうして、重要なポジションを少しずつ新人類に譲っていったんだ。

まるで、リレーのバトンを手渡すように。

母さんたち協会の人々は、ゆるやかな世代交代を求めている。新人類はコピードが歴史に現れた意義を無駄にしないよう、新しい時代にはコピードの遺産を活かしていくことを願ってる。例えば国境を消し去ったことや、戦争をなくしたことみたいに。

出版するならば、じいちゃんの日記には、かなり手を入れる必要があるそう。

特に最終日の最後の部分、研究室に乗り込んだあたりからは会話ばかりで、じいちゃんのモノローグが一切ない。編集する暇もなく死んじやったんだからしょうがないんだけど、これは手こずりそう。

特に気になるのが、じいちゃんのプロポーズ。

じいちゃんはばあちゃんのことを、心底愛してたんだらうか？

まさか、装置の開発者に命令されたから、しかたなくプロポーズした？

ボクにはさっぱり分からない。
食事時に、それとなく母さんに尋ねたけど「どうだろねえ」としか答えてくれなかった。
本当のところ、どうなんだろう？

ノックの音で目が覚めた。
机の時計は午後三時を指してた。

すっきり寝坊した。夜更かしのせいだ。
でもまあ今日はまだ元旦。あつたかい布団の誘惑には勝てない。もうちよつとだけ惰眠をむさぼってしよう。

またノックの音がした。

「誰？」

「おばあちゃんよ」

がぼつと布団をはね除けた。

あわててドアに駆け寄る。

開いた向こうには紛れもない、スピアばあちゃんがいた。

「ど、どうして？」

笑顔のばあちゃんは、コピードらしくない派手な色遣いの和服に身を包み、六十四歳の年齢を感じさせない肌つややかさで、小さな袋をボクに差し出した。

「はい、お年玉」

《新人類の母》とも称されるばあちゃん。じつさいに生んだのは母さんを筆頭に、三男二女だったけど。

でも今日のこの訪問は大きなサプライズだった。

ばあちゃんは先月、急に倒れて病院に運び込まれ、生き残った伝染病に感染したと診断された。

発見が早かったから命は取りとめたけど、三カ月は安静にする必要があると聞いてた。

「ミラクにも心配かけたね。でももう大丈夫」

ばあちゃんはぐつと腕を上げると、小さな力こぶを作って見せた。

スピカばあちゃんは、コピードにしてはかなりの変

わり者だ。よく冗談を口にするし、母さんほどじゃないけど行動力もある。

三十歳代に大学職員から映画監督に転身してからは、コピードを中心にした記録映画をたくさん作ってきた。コピードは映画になんか興味はないはずなのに。

ばあちゃんの姿形は間違いなくコピードだけど、およそ、らしくないんだ！

「ねえ、ばあちゃん。教えてくれない？」

ちゃっかりお年玉を受け取ると、ボクは尋ねずにはいられなかった。

「なに？」

「プロポーズしたいじゃない、ばあちゃんを心から愛してたのかな？」

ばあちゃんはふつと視線をそらした。そして開いたドアの間から部屋の中をのぞいて、まあつと驚きの声を発した。

「トーク・ダイアリーね。ずっと大事にしまってたけど、お母さんがお仕事に役立てたいというので、貸してあげたの」

部屋に入ったばあちゃんは、机の上から持ち上げたそれをいとおしそうに撫でた。

「ミラク、あなた、これが欲しいの？」

「ウン。できればだけど」

するとばあちゃんは、なぜかスタートボタンを押して、マイクを自分の口許に持っていった。

「おじいさんが私を愛していたか、聞きたいのね」

「ウ、ウン」

ばあちゃんは微笑むと、傾いた陽光の入る窓辺に目を移し、

「あの装置が影響を及ぼしたのは、おじいさんだけじゃなかった。そこにいた私も、装置の作った《場》に飲み込まれたのね。——すてきな時間だった。おじいさんと私の心はひとつつながったの」

ボクはたぶん、目を白黒させてたのに違いない。

そんな顔を見て、ばあちゃんはクスリと笑い、トーク・ダイアリーをボクに手渡した。

〈おわり〉